SILVA

シルバ　第八一号（平成二十七年五月）

シルバ会

シルバ

第 81 号

平成 27 年 5 月

シ　ル　バ　会

シルバ会会則

第１条　本会は「シルバ会」と称し、事務所を北海道大学農学部森林科学科に置く。
第２条　本会は会員相互の親睦を図ることを目的とする。
第３条　会員は北海道大学森林科学関係の在学生、卒業生、関連大学院修了者並びに専任教員とする。
第４条　本会の目的を達するために左の事業を行なう。
（ア）年一回総会を開く。但し必要なときは臨時総会を開く。
（イ）会誌「シルバ」を発行する。
（ウ）その他必要な事項。
第５条　本会に左の役員を置く。
（ア）会　長　　１　名
（イ）幹　事　　若干名
（ウ）監　事　　２　名
第６条　会長は本会を代表して会務を処理する。
幹事は会長の指示に従い会務を処理する。
監事は会計監査を行う。
第７条　役員の任期は１ヵ年とし、総会に於て会員中より選任する。
第８条　本会の経費は会費、寄附金及びその他の収入による。
会費は１ヵ年1,000円、学生・院生は500円とする。
第９条　必要な地方に支部を置くことが出来る。
第10条　本会則は総会に於て出席会員の半数以上の議決によって改正することが出来る。

附　　則
本会則は平成19年１月12日より実施する。

2014年度役員
会　長：小泉　章夫（林産・昭56）
幹　事：紺野　忠義（林学・昭37）、堂城　佳春（林産・昭38）、
川端　治彦（林産・昭41）、八丁　博成（林学・昭41）、
相内　泰三（林産・昭47）、孫田　　敏（林学・昭52）
会　誌：上野　俊弘（林学・平４）、日比野寛太（森林・平14）、
仲澤　　健（森林・平15）
会　計：重冨　顕吾（森林・平16）
総　務：幸田　圭一（教官）
監　事：船越　三朗（林学・昭40）、松田　　彊（林学・昭41）

瓔珞みがく　（大正九年桜星会歌）

佐藤　一雄氏　作歌
置塩　　奇氏　作曲

1　瓔珞みがく石狩の　源遠く訪ひくれば
原始の森は闇くして　雪解に泉玉と湧く
2　浜茄子紅き磯辺にも　鈴蘭薫る谷間にも
愛奴の姿薄れゆく　蝦夷の昔を懐ふかな
3　今円山の桜花　歴史は旧りて四十年
吾が学び舎の先人が　建てし功はいや栄ゆ
4　その絢爛の花霞　憧憬れ集ふ四百の
健児の希望(のぞみ)深ければ　北斗に強き黙示あり
5　醜雲(しこぐも)消えて人の世に　陽光(ひ)はうららかに輝けど
風の名残のつきやらで　狂瀾さわぐ今し今
6　潮(うしお)は暮るる西の空　月も凍らむシベリアの
吾が皇軍(みいくさ)を思ひては　猛き心の躍らずや
7　白銀狂ふ埋(うも)れ路(じ)も　踏みて拓かわむわが前途(ゆくて)
はろけき牧場(まき)に嘯けば　雲影はやし草の波
8　想を秘めし若人が　唇かたくほほゑみつ
仰げば高く聳え立つ　羊蹄山に雪潔し

道産 間伐材使用
間伐で未来につなぐ北の森
本文用紙は、
道産間伐材を配合した「OKスターライト」を使用しています。

平成27年5月12日　印刷
平成27年5月20日　発行
編集・発行　シ　ル　バ　会
〒060-8589　札幌市北区北9条西9丁目
北海道大学農学部内
印　刷　所　ジオ・プレス　電話(011)303-5963（小川）

都ぞ弥生　（明治四十五年寮歌）

横山　芳介君 作歌
赤木　顕次君 作曲

1 都ぞ弥生の雲紫に　　花の香漂ふ宴遊の筵
尽きせぬ奢に濃き紅や　　その春暮れては移らふ色の
夢こそ一時青きしげみに　　燃えなん我が胸想ひを載せて
星影冴かに光れる北を
人の世の　清き国ぞとあこがれぬ

2 豊かに稔れる石狩の野に　　雁遥々沈みてゆけば
羊群聲なく牧舎に歸り　　手稲の嶺 黄昏こめぬ
雄々しく聳ゆる楡の梢　　打ち振る野分に破壊の葉音の
さやめく甍に久遠の光り
おごそかに　北極星を仰ぐ哉

3 寒月懸れる針葉樹林　　橇の音凍りて物皆寒く
野もせに乱るる清白の雪　　沈黙の暁霏々として舞ふ
ああその朔風飜々として　　荒ぶる吹雪の逆巻くを見よ
ああその蒼空梢聯ねて
樹氷咲く　壮麗の地をここに見よ

4 牧場の若草陽炎燃えて　　森には桂の新緑萌し
雲ゆく雲雀に延齢草の　　ましろの花影さゆらぎて立つ
今こそ溢れぬ清和の陽光　　小河の潯りをさまよひゆけば
うつくしからずや咲く水芭蕉
春の日の　この北の国幸多し

5 朝雲流れて金色に照り　　平原果てなき東の際
連なる山脈(やまなみ)玲瓏として　　今しも輝く紫紺の雪に
自然の巧みをなつかしみつつ　高鳴る血潮のほとばしりもて
貴とき野心の訓へ培ひ
榮えゆく　我等が寮を誇らずや

目　次

巻頭言　アムスラー試験機の百年	小泉 章夫	1
私の林業基本法の理解について	石井　寛	3
雨龍研究林を訪ねて	能勢 誠夫	6
半世紀ぶりに天塩第1演習林を訪ねる ～昭和36年卒業生同期会～	羽賀 正雄	9
道行（その1）	上條 哲也	14
韓国実習　－引率教員より－	幸田 圭一	18
韓国実習報告　－学生の視点から－		24
年年歳歳、歳歳年年	本橋　紘	33
厚沢部町の魅力紹介	水本 絵夢	36
第69回・第70回 シルバ会ゴルフコンペ	長岡 宗男	38
東京シルバ会について	増山 寿政	41
札幌シルバ会から	幸田 圭一	42
道庁シルバ会報告	赤間　隆	44
シルバへのひとこと		46
森林科学科の近況	佐野 雄三	51
平成25年度 森林科学関連講座 卒業論文		56
同 修士論文		57
同 博士論文		59
平成26年度 森林科学関連講座 卒業論文		59
同 修士論文		60
同 博士論文		61
会務報告		62
決算報告		64
編集後記		65

“シルバはラテン語で①森林、②植樹地、樹木園、藪林、③群集と言う意味をもち、最も我等の会を表標するに適している”―林学科初代教授　新島善直先生

表紙は、北大創基100周年の記念特集号（S51、第43号）より、大正10年林学科卒で林学科教授、黒百合会会長を努められた今田敬一先生のデザイン

題名　宮井健吉　筆

巻頭言

アムスラー試験機の百年

シルバ会会長　　小泉　章夫

今から100年前、1914年は6月のサラエボ事件をきっかけに第一次世界大戦が勃発した年ですが、北大林学科はその直前の 5 月にスイス・アムスラー社から 150 トンの荷重をかけられる材料試験機を購入しました。油圧式材料試験機の 1 形式をアムスラー型試験機と呼びますが、これは本家アムスラー社の試験機です。

北大林学科は 1909 年に第 1 講座(森林経理学)の創設によって発足し、翌年に古河講堂が竣工しました。1911 年には第 3 講座(森林利用学)が開設されましたが、同講座の宮井健吉教授の要望で、最新式の材料試験機を購入したのかもしれません。宮井健吉先生は本誌「シルバ」の題字を書いた人だそうです。試験機は、当初、古河講堂の裏にあった実験室に設置されましたが、1955 年に農学部本館に増設された強弱実験室(現 NB114 室)に移設され、演習林の管理となりました。その後、1963 年に林産学科に木材加工学講座(現木材工学研究室)が設置されてからは同講座で管理され、現在に至っています。

アムスラー試験機を用いた研究成果の最初の報告は 1923 年の宮井健吉、大澤正之共著による「凍結針葉樹材ノ抗折強ニ就キテ」という論文です(北大演習林研究報告 2 巻 1 号 30-54 頁)。冬山造材の伐倒に際して、樹幹が凍結によって折れやすくならないかを検証するために、エゾマツ凍結材の曲げ破壊試験を行ったものです。演習林研究報告には、これ以降、現在印刷中のものまで含めると 13 編の論文が掲載されています。

大きな荷重をかけられるアムスラー試験機は、梁の曲げ破壊強度や柱の縦圧縮強度を測定する学生実験に使われてきました。試験時の油圧ポンプの心地良い作動音を覚えておられる同窓の方々も大勢いらっしゃると思います。長年の使用でシリンダーの摺動部がすり減ったためか、荷重が大きくなると油漏れがひどく、現在は漏れた油を継ぎ足しながら何とか 50 トン程度まで加力するのがやっとです。それでも現役で 100 年間、使用されてきたのです。荷重表示盤などのメカニカルな仕掛けの確かさには、実験する度に感動を覚えます。

農学部は、近年、研究組織・教育組織の改編が続き、教職員数も削減されてきました。2015 年には新たな改組を求められています。時代の変遷に対応して変化し続けることがよしとされる世の風潮ですが、古くから変わらないものは、いつしか伝統となり、見る者に感動を与えます。森林科学科は、これからも、確かなものを見極められる人材を世に送り出していきたいと願っております。

(昭和 56 年　林産学科卒)

林学実科卒業記念（1928 年）

100 年目の学生実験（2014 年）

私の林業基本法の理解について

石井　寛

１．はじめに

私は1961年4月に北大に入学し、1965年3月に林学科を卒業した。その後、大学院に進み、林業経済、林政学の研究者の道に進んだが、学部4年の時の1964年6月に林業基本法が成立しており、林業基本法50年は私の研究生活そのものと重なっている。ここで紙数の許す範囲内で、私の林業基本法の理解の変化について述べてみたい。会員の皆さんの参考になればと思う。

２．倉沢博編著『林業基本法の理解―これからの林業の道しるべとして』（日本林業調査会、1965年）

この本は当時、新進気鋭の林業経済研究者として技術論研究会を主宰していた東大の倉沢博先生が鈴木尚夫先生の協力のもとに、林業基本法制定の10ヶ月後に「林業基本法を新たな林業経済の理論から、どのように理解できるか」という立場から、書かれたものである。

ここで倉沢博先生の主張点をみると、資本主義経済のなかでの林業は採取的林業から培養産業的な林業へと展開しており、これまでの森林法体系は採取的林業の段階として国土保全、資源維持を課題として存立していた。林業基本法は、培養産業的林業という新しい林業段階に対応する林政を目指している。その際に重要なのは、育林過程が林業の生産基盤という性格を持っていることを明確に認識し、育林過程と採取過程を有機的関係として整合させて林業生産の高度化を図るべきであるとした。このように産業立法としての林業基本法は、産業としての林業の技術的特質を通して理解しなければ、林業基本法は林政の基本法としての生命力を持ちえないとした。

こうした倉沢博先生の理解について、当時の私の認識レベルでは、林業基本法は農業基本法と同様に、林業の総生産の増大を期すこと、林業の生産性の向上を目指すこと、林業従事者の所得向上を図ることを目的にした近代化法であるという理解に留まっていた。ただ、倉沢先生が主張されていた「林業の技術的特質を通して理解しなければ、林業基本法は林政の基本としての生命力を持ちえない」という理解については、「すこし変だな」、「大企業が支配する日本経済の成長戦略のなかで、林業基本法の果たす役割を明確にする必要があるのではないか」と考えた程度であった。

３．島田錦蔵先生の『再訂林政学概要』（地球出版、1965年）

島田錦蔵先生は1964年3月に東京大学教授を定年退職されて、1964年4月から

1975年3月まで東京農業大学教授をなされていた。東京農大での林政学の講義に使われたのが『再訂林政学概要』である。その「改版　序」において、「林業基本問題に関する調査会答申の集約として、『林業基本法』が昭和39年に公布された。同法は国の林政方針に対する宣言立法であって、この種のものとしては世界唯一の立法と言われる」(5頁)とされていることが注目される。世界的にみて、林政は森林法によって根拠付けられているのが通例であり、我が国で何故、例外的に林業基本法が制定されて、産業政策として林政が実行されるという仕組みが構築されたのかという問いは大変重要であるが、こうした問いは当時では先生以外誰からも出されていなかった。

４．小関隆祺先生の「環境問題と林業」（林業経済研究会会報83号、1974年）

私の恩師である小関隆祺先生の林政の理解をこの論文より見る。

戦前の林政は戦争中を除けば、ほぼ国土保全を主目的にする資源政策であった。戦後において経済が発展するにしたがって、産業界から原材料の低価格安定供給が強く要望されるに至った。1958年からの林力増強計画の繰上げ伐採は、その前期の特徴である資源回復維持政策に対して一定の譲歩を要求したものである。さらに1960年以降、高度成長政策がとられると、経済界から伐採量増大の要求が強く出されるように至った。林業基本問題はこのような情勢のなかで答申された。農業における自立農家の考え方の影響を受けたとみられる家族経営的林業の提案は、林業界においていわゆる担い手論争を引き起こしたが、実を結ぶことなく、結局は産業政策としての林業政策への志向が主張され、その後の林業の企業性強化へと引き継がれた。

一方、国内生産による木材生産は林政基調の変化にも関わらず、飛躍的に増大することは不可能であった。産業界の原材料要求に対し1960年以降、外材輸入促進政策がとられ、その結果、輸入量は激増した。時代の要請とはいうものの、実は産業界の要請であり、林政の総資本への従属性が指摘されるとした。

なお林業基本法の審議過程において、衆議院農林水産委員会では法案に対する参考人の意見聴取が3回にわたって行われた。そのなかの1回として、1964年6月2日に札幌市で公聴会が開かれた。小関先生は学識経験者として、産業政策としての林政とはいうものの、それは資源政策の成果の上に行われるものであり、資源政策から産業政策への転換という捉え方は必ずしも正確ではないと述べられた。

５．ドイツの1975年連邦森林法の性格

1964年に産業立法として林業基本法が制定されてから11年後の1975年に、ドイツでは連邦森林法が歴史的に初めて制定された。同法は連邦レベルの枠組み法であり、各州はその原則規定に従って、独自に州の森林法を制定しなければならないものである。

ゲッチンゲン大学林学部の林政の教授であったカール・ハーゼルが1971年に『林業

と環境』を Paul Parey 社から出版し、農林省林業試験場経営部に勤務していた中村三省氏が 1979 年に日本林業技術協会から、同書を翻訳・出版したのである。

カール・ハーゼルの著書の特徴は、倉沢博先生や鈴木尚夫先生が主張したような「新たな林業経済の理論」に依拠して政策論を講じるのではなく、ビクター・ディートリッヒが展開していた林政学的機能論に基づいていた。そこでは森林・林業と工業社会の関係理解が重視されており、林業の国土保全的使命や森林の保健休養的な利用に深い関心が寄せられていることが特徴である。

ここで連邦森林法の主要規定をみると、第 1 条では、森林には木材生産などの利用機能、水・大気などの循環系と環境の保護機能やレクリエーション機能があることから、森林を維持し、必要に応じて増加させること、秩序立った森林施業を持続的に行うこと、林業を助成すること、公共の利益と森林所有者の利益との調整を図ることに、林政の目的を置いている。

第 9 条では開発許可について規定し、森林は所管官庁の許可を受けた場合に限り、転用できるとした。第 11 条では森林施業について規定し、森林は秩序に即し、持続的に施業されねばならないとして、森林所有者には再造林を義務付けた。第 14 条では森林への立ち入り権を規定し、何人もレクリエーションの目的のために森林にたちいることが出来るとしたのである。さらに第 41 条では、森林の助成につき規定し、森林の利用機能、保全機能およびレクリエーション機能により、公的に助成されねばならないとした。

このようにドイツの連邦森林法は持続可能な森林管理を実現するために、生産抑制的な性格が強く、また国民には森林への立ち入り権・入林権を保障していることが特筆される。ここで林政を根拠づける基本法のあり方として、ドイツの連邦森林法的なあり方が望ましいのか、それとも日本の林業基本法的なあり方が良いのかという問題が 1975 年の連邦森林法の制定によって生じることになった。これは林政というものをどのように理解するのかという問題にも深く関わっている。

日本は 1960 年代と 1970 年代の経済成長を経て、1970 年代末までに先進資本主義国化するとともに豊かな社会を実現し、自然環境保全への国民の関心が急激に高まった。ドイツの連邦森林法の理念を知ることによって、同法の時代的優位性は明らかであると私は考えた。林業基本法は林政というものへの省察が見られず、我が国の高度経済成長という時代的な背景に深く刻印されて制定された法律であったと捉えるに至った。

そうしたことを確信として、言えるようになったのは 1990 年 10 月から 1991 年 7 月までのフライブルク大学林学部林政学講座のニースライン教授のもとで行った林政の比較研究の成果であった。

(昭和 40 年　林学科卒)

雨龍研究林を訪ねて

能勢　誠夫

―はじめに―

5月始め、同窓の藤原滉一郎さん（昭30・林）が主宰し、私も会員のNPO法人から5月末の森林見学会の案内がきた。幌加内町朱鞠内の民有林の広葉樹植林地を見学、同町母子里の北大雨龍研究林に一泊、研究林の森林施業を見学する一泊二日の日程である。母子里は、65年前（昭和24年）林学科1年の秋の実習で、演習林の山小屋風二段ベッドの学生宿舎にランプの灯のもと宿泊、今もクラス仲間が集まると話題になる思い出の地である。米寿になり足腰の衰えを痛感しているが、「母子里」の懐かしさと二度とない機会であることから、思い切って参加した。同窓の笹賀一郎さん（昭50・林修）がインストラクターをつとめ、研究林の教職員皆さんの協力があり、天候にも恵まれ素晴らしい森林見学会となった。久し振りに森林の精気を思い切り吸い、懐かしき母子里の里を訪ね、私にとって感ずることの多かった旅であった。

―広葉樹植林について―

幌加内町朱鞠内地区の民有林で篤林家が10年来つづけているハリギリ植林地を見学した。現地は植林木のほとんどが豪雪地帯の雪害、エゾシカの食害で姿を消し、点在する生き残りの植林木も傾斜し、エゾシカの食痕があった。もともと広葉樹植林はむずかしい。戦前から多様な広葉樹植栽が行われているが、僅かに耕地防風林にヤチダモの成林例を見る程度である。

えりも岬緑化事業は、国有林が60年余かけ、不毛の荒廃地をクロマツ樹海に変えた大事業である。緑化事業関係者として私も会員の「えりも緑化研究会」は20年来、秋に現地に集まり、クロマツ林の施業などを検討している。クロマツ一斉林の健全性を確保するため広葉樹の混植をすすめることとしたが、植栽木はすべてエゾシカに食害され失敗している。ところが、会発足時、試験的にクロマツ林に列状除間伐を行ったが、その伐採列にカバ、ヤナギ、アオダモ、ハンなどが自生し20年後の現在、クロマツと競い合うように成育している。エゾシカの食害対策、多様な広葉樹の育林技術の確立未だしの現在、広葉樹林造成は、植林によらず萌芽、天然下種など天然更新によるべきだと私は考えている。

―取り残されたカラマツ―

広葉樹植林地を見学後、林道周辺の森林を見て歩いた。突然、自然林の中に通直で枝下高の高い見事なカラマツ大径木を発見した。よく見ると孤立木でなく列状に並んでいる。私は戦後の緊急開拓を思い出した。苦労して開拓した農地を強風から守るため耕地

防風林としてカラマツを植えたのであろう。しかし、極寒、豪雪の地での農業経営は困難で、手塩にかけたカラマツに心を残しつつ離農、「取り残されたカラマツ」は農地が森林に回帰するのを見守りつつ成長をつづけ見事な大径木となって私を驚かしたのであろう。戦後の緊急開拓は、農業経営上不利なところが多く、離農者も多かったという。「取り残されたカラマツ」は本道各地に見られるのではなかろうか。限界集落など山村崩壊の危機が叫ばれている本州でも、手塩にかけて育てたスギ林に心を残しながら離村し、所有者から「取り残されたスギ」が多いのではと私は思う。最近、花粉症の元凶としてスギは目の敵にされている。かつて、山村の人々は、ささやかな造林補助金を得て、国土緑化の思いをこめてスギを植えたのである。当時、花粉症の話など全くなかったのである。都市過密化、車社会などの公害に全くほおかむりして、ひたすらスギを悪者にし、果ては「スギを植えたのはけしからん」「スギを伐って燃やしバイオエネルギー源にしろ」など山村の人々のスギに対する情念を無視した暴論が横行しているのは腹立たしい限りである。「取り残されたカラマツ」を見ながら私の想いは「取り残されたスギ」に馳せたのである。

―懐かしき「母子里」の里―

65年前、私達クラス一同は、列車で上音威子府から名寄へ移動、深名線に乗り換え、「北母子里」で下車した。駅名が何ともロマンチックだった。電気がなく、石油ランプが灯だった。その夜、僅かな酒に酔い痴れ、木造山小屋風二段ベッドの宿泊室が楽しくいつまでも話し声が絶えなかった。さて、今は道路が整備され列車はバス、自動車に変わった。心に残る木造山小屋風宿舎も25年前しょうしゃな近代風建物に建て替えられている。食堂、浴室など立派になったが宿泊室は二段ベッドで昔と変わらず面白かった。その夜、見学会一行と研究林教職員の皆さんの合同焼肉パーティでいつまでも賑やかだった。翌朝、「・・・郭公の声静寂(しじま)に徹(とお)り、清涼しき朝の熟睡(うまい)を破(あが)る」(昭13恵迪寮々歌「津軽の滄海(うみ)の」3番)で目覚めた。

札幌で久しく聞かなくなった郭公の声に誘われ外へ出てみた。朝霧が次第に晴れ上がり、周囲に聳(しょう)立するカラマツ、カバ、ヤチダモ、ニレなどの巨木が姿を現し、郭公にウグイスの鳴き声が加わった。爽快な朝の空気を胸一杯に吸い、生き返った気持ちだった。同時に既に彼岸に旅立った65年前の友を偲び、今回の旅が私にとってセンチメンタルジャーニーだったと思ったのである。

―ミズナラ保存林―

研究林職員の案内でミズナラ保存林を見学した。枝下高が高く、木材業者垂涎のミズナラ大径木があたかも純林のように林立しているのに驚いた。ミズナラの良材は、枕木、叶材の原料として、20世紀初頭から伐採され、今では、ミズナラ大径木は、伐残しの暴鎮木(あばれぎ)が定番となっている。保存林を見学しているうちにかつて私が見たミズナラ林を思い出した。昭和27年秋、札幌営林局に入った年であるが、旧御料林が設定した択伐

試験地の成長調査のため、夕張地区国有林に出張した。奥地の開拓農家に泊まり、試験地に通ったが、その途中にミズナラ林があった。枝下が極端に高く、通直でウラゴケの見られない幹の上部に枝が茂っている針葉樹顔負けの樹型のミズナラ大径木が群生していた。この地で一服し、素晴らしいミズナラ林を見ながら思ったことは、このような良質のミズナラがどうして此の地に群生したかということであった。ミズナラ保存林も同様、良材が純林のごとく群生する理由は解らない。「天の時」「地の利」による偶然の産物なのか自然は解らないことが多い。定山渓国有林でミズナラの稚樹が群生しているのを見たことがある。また昭和初期の山火事跡に植栽されたドイツトウヒが成林し、間伐など施業を行い明るくなった林床に、ハリギリが多数更新しているのを見てびっくりしたことがあった。林をねぐらにしている鳥が種子を運んだのではと言われている。ミズナラ保存林を見ながら自然の摂理をまた考えさせられたのである。

―アカエゾマツ保存林―

広葉樹植林地を見学後、雨龍ダムを訪れた。朱鞠内湖を産んだダムとしては意外に規模が小さいと感じた。静かに波打つ湖の大部分は、北大雨龍演習林のアカエゾマツを主体とする森林だったという。学生時代、森林利用学大沢正之教授から、ダム建設に関わる話を聞いたのを思い出した。戦時中の突貫工事で工期が短縮され、演習林もあわてて湛水域の立木処分をすすめることにしたが積雪期に入り適正な調査のできないまま処分、伐採側も伐出を急いだので、雪がとけると、丸太一丁撮れる程伐根が高くそのまま湖底に沈んでしまったという。研究林宿舎の玄関ホールにアカエゾマツの根株から加工した巨大なテーブルがある。ダムの水が涸れた時、湖底から表れた根株から採取したという。かつてのアカエゾマツ林が偲ばれる思いだった。さて、アカエゾマツ保存林は、雨龍川源流地帯の湿原に成立した純林だった。遅い融雪が終わったばかりで森は水びたしの状態だった。白い水芭蕉、黄色のエゾリュウキンカがいたるところに咲いていた。湿原地帯に倒木、根株更新で成立したアカエゾマツの純林で、玄関ホールのテーブルのような巨木は見当たらなかった。湿原という条件下で他樹種の成立が見られないまま、生きつづけるアカエゾマツの生命力に感動した。

―終わりに―

足腰の衰えから同行者に迷惑をかけるのではと心配した見学行であったが、林道と自動車のお陰で楽しく旅を終えることが出来た。自分の年齢から考えて森に深く入る機会はもうないのではと思う。懐かしき「北母子里」を再訪、朱鞠内湖の静かなたたずまいを眺め、探訪した森に自分の経験、考え方を重ね合わせ、もう一度、森林、林業の行末を、自分なりに考えることが出来た旅であった。

（昭和27年　林学科卒）

半世紀ぶりに天塩第１演習林を訪ねる

～昭和３６年卒業生同期会～

羽賀　正雄

１．はじめに

シルバ第78号、和君の「36卒50周年同窓会に寄せて」に卒業40周年記念誌に触れた後に「羽賀君のもとで作成中の 50 周年記念誌、そして 3 年後の中川研究林訪問の記録が加われば…半世紀に及ぶ 40 名の仲間の軌跡が綴られることになる。みんな揃って喜寿・傘寿を迎え、お互いの長寿を喜び合いたいものである。」と記されている。

この中川研究林(我々にとっては天塩第 1 演習林)での開催経過については、和君報告に詳しいが要するに、林学時代の原点ともいえる天塩演習林を、足腰が元気な内にもう一度訪ねたいという皆の思いから決行されたものである。しかも、同期の大多数が喜寿を迎えるという節目の年でもある。まとめ役の坂崎君を中心に演習林との連絡調整には、隣接する旧天塩第 2 演習林長経験の湊君が当たり、和君がサポート役となり、去る 9 月 4 日(木)～9 月 5 日(金)にかけて実現した。移動は坂崎君(旧国鉄勤務)の斡旋で JR とする。

２．１日目：ポンピラ温泉で語り合う

9 月 4 日。幸いに晴天、札幌駅で 12 時 30 分発特急「さろべつ」稚内行に 10 名乗車、途中岩見沢駅から 1 名、旭川駅から 2 名加わって総勢 12 名が北へ向かう。特急とは云え 4 両編成、1日1本のみの運行で寂しい感ありだが、車窓に広がる初秋の北の大地は心休まるものだった。と過ぎし日の思いに耽っていたのは切符の関係で席の離れていた小生のみか…他のご一行はビール片手に和気藹々、天田、星野君を始め皆が学生気分に逆戻り…ほぼ 4 時間後に目的の天塩中川駅に到着した。

宿は駅からタクシーで数分の「ポンピラ アクア リズイング」というポンピラ(誉平)温泉唯一の公共施設で、一風呂浴びたあと宴会となる。坂崎幹事長の経過報告・乾杯により始まったが、3 年前の卒業 50 周年の 19 名から 7 名減で、テーブルが長方形から正方形に替りこじんまりしたが、卓を囲んで放談するには恰好のスペースとなる。幸い不参加者はそれぞれの都合によるもので、天界行きはおらず救われる。話題は何時もの通り「毎日が日曜日」をいかに過ごしているか、「年相応の体調」をいかに保っているか、「元気さ増す奥様」とどう折り合いを付けているか等々脈絡なく交わされたが、やはり往時の演習林でのあれこれに大輪の花が咲いた。

演習林での全員参加の実習は、昭和 34 年 9 月の苫小牧演習林と 35 年 2 月の天

塩第一演習林である。苫小牧のいわゆる夏山では、測量、林道設計及び測樹(樹幹解析)を、天塩第一の冬山では、森林利用(架線集材、チェンソー造材)、スキーによる林況調査を実習している。「苫小牧」については、平成3年5月に卒業30周年の集まりを支笏湖畔・レイクサイドホテルで行った際、翌日に視察している。しかしながら、演習林の思い出となるとやはり「天塩」である。34年4月…教養学部から林学・林産学科に完全に移行してから1年、最終年を目前に一番油の乗り切っていた時期の合宿生活、それだけに昼夜を問わずエネルギーに溢れていたと云える。

とりわけ夜の部は思いが深く、夜間授業の名講師である臼井・河井・国中君、優秀な生徒であった浅井・遠藤君(いずれも故人)の参加が無かったことに残念の声が多かった。演習林に務める地元の若い御嬢さんたちとのダンスパーティでの高野君のギター演奏も話題となった。夜間に比べ昼の部の思い出は、「そんなことあったかな？」「全然憶えてないよ！」「そりゃ苫小牧だよ！」などと各人に精粗がある。宴もたけなわ、皆が酔いつぶれない内に、例によって集合写真を撮って、また座り直して歓談…次回の集まりは55周年の頃(おおむね傘寿)、6月開催の植物園親睦園遊会とあわせて軽く行うことを決めて9時過ぎにお開きとなる。

３．２日目：中川研究林を歩く

引続き晴天。7時半朝食、8時半ホテルロビーに集合、玄関前でご案内いただく野村睦林長、奥田篤志技術班長、浅野憲昭林業技能員の諸先生に迎えられ、概略の説明を受けた後に用意されたマイクロバスに乗り組む。和、湊君以外はほとんどが50年振りの演習林であり心弾む思いである。

＜学生宿舎＞

先ずは思い出深い学生宿舎に向かう、と云っても赤レンガの宿舎は建替えられ3階建ての白色の建物となり一階が車庫・倉庫、2階が展示室(動物標本、林業用具等)、実験室、食堂、3階が寝室等と充実している。看板に「北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 森林圏ステーション 中川研究林」とある。上方落語の前座噺で知られる「じゅげむ寿限無」を思い出す。林長に略称を聞くと正式なものはなく、相手により中川研究林、FRS(Forest Research Station)などと適宜対応しているとのこと。関心あるのは寝室の様子…「きはだ、せん、あかえぞ、いちい」など室名に応じた内装となっており、木の香ただよう快適空間である。皆が「すばらしい」と感動する。ここでの体験は、学生達が将来マイホームを建てる際に木質環境を意識する契機になるのではと期待される。

次いで今回のハイライトである旧学生宿舎跡に移動する。「…兵どもが夢の跡」ともいえる状態で、草原が広がり木製の音威子府樹木園の看板が見えるのみである。「宿舎はどこにあったのかな？」「全然実感が湧かない！」等々がやがや賑やか…湊・和君から概略の位置について説明を聞きなんとなく納得する。赤レンガの壁に白い窓

枠の入ったロマンある横長の建物をイメージしつつ 50 年のブランクを埋める。

＜集約的森林施業―照査法＞

いよいよ山に入り歩道を登ることしばし、見晴らしのよいところでストップする。林長から「手前谷の向こうの鬱蒼とした森林がトドマツ主体にイタヤカエデ、シナノキ、ミズナラ、ダケカンバなどが混交する天然林である。資料にあるように、このうち約 260ha を「照査法試験林」とし集約的森林施業に関するデータの収集・分析を実施している。昭和 42 年(1972)に設定され 40 年が経過し、全木調査をもとに 10 年毎に択伐を実施し過去 30 年間の林分動態を対照区との比較でまとめている。」との熱の入った説明を受ける。

突然に照査法という古典的な言葉が飛び出し「照査法って何だっけ？」「森林経理学で聞いたような気もするが」との反応が出る。小生たまたま必要あって勉強？していたので「照査法は死語かと思っていたら、最近、高校の教科書に置戸の事例が紹介されており驚いたが、ここでも取組まれていると聞きさらにびっくり。北海道の天然林施業というと東大の林分施業法が注目され、我が母校は何をやっているのかと歯痒い思いをしていたが、今回の説明を聞き安心した」と発言すると、林長から「対照区との比較において未解明の課題も残っているが、スタート時と異なり全木のデータは JIS に入力されており、より詳細な分析も可能であり引き続き実証的調査を進め、択伐天然更新方法の開発に取組みたい」との趣旨の意欲ある発言があった。学生に戻って講義を聞いた一時であった。

＜ビッキの樹＞

バスで移動、現場最後の目的地三角点へ向かう途中林道の脇に枝下の高い真直ぐなアカエゾマツの大樹が立っている。彫刻家として著名な砂澤ビッキ氏(以下ビッキという)が好んだことから「ビッキの樹」として親しまれているとのこと。直径約2m、樹高約27m、樹齢 300～400 年…ビッキを惹きつけた笹島(おさしま)の森を象徴する名木といえる。

＜三角点＞

歩道を登る。冬山林況調査の一環としてスキーを付けて登ったのが、この三角点とのことであるが一同記憶の外である。後期高齢者にとっては息が切れる坂道で、日頃の鍛錬の差が表れたが全員登頂に成功する。仲俣君が携帯用ストックを使っていたのには感心する。頂上は平であるが周囲の樹木が大きく視界はゼロ、三角点(標高 404m)は少し離れた灌木の中にあり見られず心残りではあったが記念写真を撮って下山を始める。「スキーで苦労したが、こんな所まで登ったのかな」と関谷君のつぶやきが聞こえる。バスに乗ると正午過ぎ、とたんに空腹を感じる。林長から「昼食は音威子府名産の黒ソバを味わってください」と嬉しい案内がある。

＜黒そば＞

道路側のそば屋一路食堂に入る。メニューを開くと…ざる、月見、天ぷら、きつね、かしわ、山菜などあるべきものは揃っているが、普通でないのがソバの黒さである。イ

カ墨とは違った感触で、食べてみると、意外と滑らかでこしもあり美味しい。

＜中川研究林本部＞

昼食の後本部事務所に立ち寄る。ビッキの大きなトーテムポールが 3 本…我々を迎えてくれるが、1本は風雪のためか上部が破損している。所内を案内された後、林長室でお茶の接待を受け、しばし本日の諸々について語り合う。と、林長から熨斗紙に包まれた「手ぬぐい」を手渡される。開いてみると山火事注意をアピールするもので、ビッキの堂々たるトーテムポールがデザインされている。思いがけないプレゼントに一同感謝する。そんな中で窓から見える高校が話題となる…高野君が「先程、あそこの生徒からコンニチワと声をかけられ、さわやかな気分になった。どんな学校かな？」と口火を切ると林長から「村立の美術工芸高校で全国から学びに来ており全寮制である。木工技術は相当なレベルを習得している」との説明がある。と、近藤君はじめ数名から「時間があるなら見学したい」との意見が出され、林長が学校と調整された結果 OK となり、急遽高校に向かう。

＜村立おといねっぷ美術工芸高校＞

正面を入ると床に並べた木工品、壁に掲げた絵画が目に入る。池田先生(教頭)がにこやかに学校の概要を説明され、これらの展示品は 3 月卒業する生徒達の卒業制作であることを知る。テーブル、椅子、箪笥等々…接合、塗、材料配色など見事な出来栄えである。壁に並ぶ絵画作品…100 号いっぱいに描かれた画面は若いエネルギーに溢れている。3 年間―実質 2 年間でここまで技術を修得出来る秘密はどこにあるのか？さらに「これらの作品は、1 年間展示公開したあと、全て制作者の親元へ学校から贈ります」という。一同から感嘆の声があがる。あと工作室、絵画室、材料庫など回ったが、工具箱収納棚前で「これらの工具箱は、ご覧のように一個一個細工が違っている。これらは入学の課題で式当日に各人が製作持参したものである。学校からは大きさの規格だけを与え、他は生徒の才覚で作る。3 年間使用した後卒業時に各人に返す」との説明に再び感嘆の声、先程の秘密の答えはこれらの対応にあるのではないかと得心する。「もっと若かったら入学したいな」との松下君の言葉に共感する。ビッキの独創的な技と豊かな演習林により「森と匠の村」が生まれ、そこから若い匠が育っていることに拍手を贈りたい。

＜ビッキ・アトリエ３モア＞

時間にゆとりがあり最後にビッキのアトリエ（旧筬島小学校）跡を訪ねる。現在はビッキの展示館で様々な作品が並ぶ。樹華・樹気など独特な表現が使われており、作者の木々との対話が伝わってくる。

４．おわりに

以上で全コースを終わり、道の駅で土産や車中の飲み物を調達し、音威子府駅前

で研究林の皆様とお別れする。15 時 46 分発サロベツで一路札幌へ、札幌着 19 時 08 分、ここで 2 日間の同期の集まりは無事終る。

今回の集いを通じて、演習林が FRS へ移行し大きく開かれたより充実した組織・施設に進化したことを実感でき実りある催しとなった。これも、ご多用のなか丸一日ご案内いただいた中川研究林の皆様の適切なガイドの賜物であり、心から御礼申し上げます。また、段取り担当の坂崎、湊、和君、写真・CD 担当の今野君に感謝する。

（昭和36年　林学科卒）

【追 記】この種の記事としては、色気のないものとなったが、半世紀ぶりの天塩演習林訪問であり、最初にして最後、40 周年・50 周年記念誌の別冊続編と位置付け行動記録的にまとめた。参加者はこの 2 日間の記憶を風化させないように、不参加者は本稿により紙上参加出来るようにしたものである。また、現地で熱心に対応していただいた方々への我々のレポートでもある。なお、記載にある不備や錯誤は、小生の老化の表れでありお許し願いたい。なお、案内状発送数 26 名、参加者 12 名。不参加者 14 名中体調不良 6 名。2 年後の 55 周年傘寿の集いでの再会を期して筆を置く。

＜三角点登頂記念＞

後列向かって左から：和、今野（林長）近藤、関谷、羽賀、仲俣、坂崎。

同前列左から：天田、星野、松下、湊、高野

道行(その１)

上條　哲也

はじめに

旅の過程で見聞する景色や地名や、その時々の心の在り様を表現することを「道行」というそうです。最近出かけた場所をご紹介します。基本的にマイナー志向ですが、楽しんでいただければ幸甚です。

１．ミャンマー国アーロン

ヤンゴンに行く機会がありましたので、会田雄次「アーロン収容所」のアーロンを見に行きました。ヤンゴンの繁華街から歩いても行ける距離です。私と同年代以上は読まれた方も多いでしょう。最初に読んだのは 30 年位前ですが、「戦時と平時で活躍する人物が異なる」ことが印象に残っています。環境次第で遺伝子のスイッチが入ったりオフになったりするらしいので(村上和雄「望みはかなう、きっとよくなる」)、私もそのうち活躍するかもしれません(やる時はやる、でもいつやるのか今もってわかりません)。ちなみに、アーロン収容所跡は見つかりませんでした。ヤンゴン川桟橋近くの普通の町並みでした。

２．奇跡の一本松(岩手県陸前高田市)

三陸海岸を久慈から気仙沼まで移動してきました。久慈市役所勤務の友人再会と、4月営業再開三陸鉄道乗車を兼ねました。大震災から3年5カ月経過しており、津波の被害を直接感じる場面は保存される被害小学校を除いて見ることはありませんでした。津波被害地域の嵩上げ工事が行われています。陸前高田市を2011年10月に訪問したことがありました。その時は被害建築物や陸に上がった漁船、陥没した土

アーロン地区

奇跡の一本松

地を見ましたが、今回一瞥した限りでは綺麗になっていました。バスの車中から奇跡の一本松が見えました(写真では判別困難かもしれませんが、矢印の下にあります)。

３．梅若塚（東京都墨田区向島木母寺）

浅草から隅田川を渡って近くです。息子梅若丸を人買いにさらわれた母親が、狂女となり京都から隅田川までやってきて、息子が病で亡くなったことを知ります（能「隅田川」）。息子が埋められた場所が梅若塚です。母親が着いた日が一周忌で、母親が祈ると梅若丸が塚から姿を現わします。12 歳で亡くなった梅若丸の辞世の句が残されています。

「尋ね来て　問はば応へよ都鳥　隅田川原の露と消えぬと」

４．蔵前神社（東京都台東区蔵前）

ここは、落語元犬（もといぬ）の現場です。落語好きな方はご存じでしょう。蔵前八幡に住んでいた純白の野良犬シロは、八幡様に願をかけ満願の日に毛が抜けて人間になったという話です。休日でしたが、浅草から一駅の距離にもかかわらず人通りは少なく静かでした。ビルに囲まれて野良犬はいませんでしたが、小さなシロの像がありました。

梅若塚

元犬シロ

５．無縁坂（東京都文京区湯島）

上野不忍池から東大鉄門に向かう坂道です。南側は旧岩崎邸です。「母がまだ若い頃、僕の手を引いてこの坂を登る度いつもため息をついた」 さだまさしのヒット曲を思い出す方もいるでしょう。森鷗外の雁（がん）の舞台です。毎夕散歩でこの坂を下る医学生岡田と、岡田に恋心を抱くお妾さんお玉の話です。蛇がお玉の小鳥を飲み込む場面では、偶然手を貸した岡田と口をききますが、あとは目礼のみ、ただひたすら悶々とするお玉の心情が描かれます。

鷗外はこの辺りを散歩したのでしょう。お玉がいたはずの場所は、マンションと保

育園でした。岡田のつもりで無縁坂を下り、左折して暗闇坂を上り、弥生坂を下り、谷中に出て霊園を通って日暮里駅まで歩きました。もしかすると、お玉さんとすれ違ったかもしれません。

６．熊本藩細川家下屋敷跡（東京都品川区高輪）

赤穂浪士大石内蔵助以下 17 名が切腹した場所です。お墓のある泉岳寺前の伊皿小坂を上り交差点を左折して、都営アパート奥にあります。閉ざされた門の中を覗くと庭石と草が生い茂るばかりです。泉岳寺は多くの人がいますが、こちらはひっそりとしています。

浅野長矩は 17 歳の時に吉良上野介指南で勅使饗応役を務めたことがあるのに、35 歳で刃傷を起こした理由は不明です。ストレスが原因でしょうか？大石内蔵助も困ったことでしょう。享年 45 歳、辞世は、

「あら楽や思ひは晴るる身は捨つる浮世の月にかかる雲なし」

無縁坂

細川家下屋敷跡

７．芭蕉稲荷大明神（東京都墨田区常盤）

隅田川清洲橋上流側の左岸にあります。芭蕉が住んでいた場所とのことです。今は小さなお稲荷様があります。区立芭蕉記念館では俳句サークルが盛況でした。また、神田川沿いには、椿山荘隣に芭蕉庵があります。こちらも訪問しました。日本庭園が閑静で散歩に良いところです。芭蕉が神田川工事に従事した際には、ここで働いたそうです。こちらは観光客が来ていました。深川で呼んだ桜の句です。

「花の雲　鐘は上野か　浅草か」

８．薬王寺（東京都品川区三田）

俳人加賀千代女（かがのちよじょ）をご存知ですか？恥ずかしながら知りませんでした。実は最近寄席に通うのですが、そこで聞いた「加賀の千代」で知りました。俳句を読んだ井戸があるとのことで、出かけてきました。お墓の角にある普通の井戸です。

本当に加賀からここまで来て詠んだのか若干疑問は感じますが。朝顔が好きな方だったそうです。残念ながら朝顔は見当たりませんでした。

「朝顔に　釣瓶取られて　貰い水」

芭蕉稲荷

朝顔の井戸

おわりに

楽しんでいただけましたか？気が向いた時に、気が向いた所に行ってきます。多分、その 2 もあります。お楽しみに。

（昭和 60 年　林学科卒）

韓国実習　ー引率教員よりー

幸田　圭一

2014年度の「造成施業実習」(いわゆる「韓国実習」:8/19～8/25実施)の引率を行なった。この実習は森林科学科3年生を対象とした選択科目であり、ソウル大学の南部演習林で8月下旬に行なわれる実習に、北大の学生が合流するものである。6月に北大中川研究林にて行われる「動態実習」にはソウル大学の学生たちが合流するが、両大学が相互訪問することで国際交流を深めることを意図しており、かれこれ10年以上続いている。本「シルバ」誌上でも何回か学生による「訪問記」が掲載されているが、今回は引率教員の視点から見た忘備録的メモと、学生側の視点から見た訪問記を同時に提供し、一種の近況報告としたいと考えた。

8/19 (火)

移動日。不測の事態に備えて千歳出発組は定刻より2時間以上早く集合。手荷物預かりも出国審査もあまり混雑していなかったため、待ち時間がやや長くなってしまった。2時間前の集合で十分であろう。飛行機は定刻(14:15)から5分遅れで出発。到着時、到着口にてソウル大学の学生2名(男女1名ずつ:6月の動態実習の参加者で男子学生は日本語が達者)の出迎えを受ける。その間、早く帰国する予定になった菅井君は、帰路のKTX(順天ーソウル間)の切符を購入する。6017番乗り場のリムジンバス(18:30発)で終点のソウル大学内宿泊施設(Hoam Faculty House;以下、HFH)に向かう。ソウル市内で渋滞に会うも、ほぼ2時間でHFHに到着(19:40頃)〔**写真1**〕。ホテル玄関先に荷物を置いてすぐにチェックインの手続き。ソウル大の女子学生1名とアシスタントの方に連れられ、HFHから市街地方向に徒歩15分の焼肉屋〔**写真2**〕で楽しく夕食。この夜の会食では12名で計100,000ウォン(10,000円)ほどの出費。その後、滞在中の学生の経済的負担(食事)を軽くするため、学

写真1

写真2

内の外国人留学生用dormitoryに隣接するコンビニ・学食を紹介してもらう。案内の女子学生はやや英語でのコミュニケーションに難があったこともあり、疲労の色が強く、夜10時ごろまでつき合わせて申し訳ない気持ちになった。各自買い物をした後、就寝。

8/20（水）

この日もほぼ移動日。10時までにHFHをチェックアウトし、10時半にKang Kyu-Suk教授（ご専門は林木育種・遺伝学）に手配していただいた貸し切りのマイクロバスで、Kang先生とアシスタント1名帯同の下、南部演習林に移動開始。高速道に乗るも、実質4時間以上の道中なので、途中2回の休憩をはさむ。12時頃に最初のサービスエリア（以下、SA）で昼食休憩。テレビを見れば、この日、広島県では記録的な豪雨で、大規模な災害の様子が映し出されていた。13時に出発し、しばらく韓国中部を進むと、延々と続く大規模な栗の植栽林〔**写真3**〕や高麗人参畑が車窓から見える。古代朝鮮王朝、百済の古都「泗沘」（サビ）があった扶餘（ブヨ）郡を右手遠方に見据えながら、「私はこのあたりの出身なんです」とKang先生。14:40頃に二度目の休憩（10分間）。南に向かうにつれて、雲行きが怪しくなる。夕食前に南部演習林についてもやるべきことがないためか、1時間ほど時間を調整する必要があるとのこと。Kang先生のおススメで順天（スンチョン）の庭園見学をすることに。「順天湾庭園」には15:45頃到着し、入園料5,000ウォンを払って17時頃まで各自、自由行動とした。広大な敷地の中に、各国の庭園を集めた一種のテーマパークだが、雨天なのがやや残念であった。17:10頃に順天湾庭園を出発し、17:40過ぎに南部演習林宿舎に到着〔**写真4**〕。18:00より宿舎内の食堂で夕食。夕食後、学生らはソウル大の学生らと宿舎2階で飲み会に。幸田も20:30か2時間ほどKang教授、ならびに新しくソウル大学農業生命科学部森林科学科森林環境科学コースのfaculty memberに就任されたPark Il-Kwon教授（ご専門は樹木のシグナル伝達と生理応答）と簡単な会食・意見交換。

写真３

写真４

8/21（木）

朝8時に朝食。9時からKang教授による材木育種・有良木選抜に関する講義が、途中休憩をはさんで10:40頃まであったが、午後からの演習に対応するものであった。講義

後、お昼までは韓国人学生たちには講義を補う自学自習の時間とされた。12時に昼食。13時からエコツーリズムがご専門のKim Seong-il 教授による「地球温暖化」に関する基礎の講義。ここに将来の進路の参考にすることを目的とする地元の高校生らが合流。オープンキャンパスのような企画であろうか。14時過ぎから班に分かれて演習林宿舎そばの3ヶ所の植栽林を対象とした野外演習を行なう。第1班はテーダマツ、第2班はナラ、第3班はモミの植栽林へ入る。テーダマツ植栽林〔**写真5**〕は1959年に設立し、リギダマツとの交配によるハイブリッド生産を目的としていたとのこと。また、モミの植栽林の歴史はさらに古く、日本統治下に植林されたものとのことで、入口に2本のコウヤマキが植えられていた点が印象的であった〔**写真6**〕。なお、演習では、胸高周囲径の測定や材積indexの計算、成長錐を用いた樹木のコアの採取等を行なった。18時から夕食。この日は曇天ながらも天気に恵まれ、演習林宿舎裏の会場で野外バーベキューを全員で楽しんだ〔**写真7**〕。演習林技術職員のPark Chang-Gwounさんが炭火を豪快に操り〔**写真8**〕、準備していたという計20kgの肉は全て参加者の胃袋に収まった。この後、21時半ごろから幸田はKang先生と小一時間、差し向かいで酒食を伴う意見交換会。スイカと桃、ミニトマトを肴に韓国焼酎とウイスキーを楽しませていただいた。日本では2,000円程度で手に入る「バランタイン12年」が韓国では3倍の値段であると聞き、驚いた。

写真5

写真6

写真7

写真8

8/22（金）

8時に朝食。菅井君は帰国のため、ここで演習林を後にしたが、ご厚意により技術職員のPark Chang-Gwounさんに車で順天駅まで送っていただいた。9時から森林経済学がご専門のYoun Yeo-Chang教授から森の恵みを活用した村落の経済に関する講義があった。11時からはその講義内容を踏まえた演習に突入。弁当持ちで班ごとにマイクロバスに乗り込む。演習林近辺に存在し、それぞれ異なる特徴を持った6つの村落を訪問し、アンケート用紙片手に対象村落に住む各戸の家長を対象とした聞き取り調査を行なった。内容は村落の守り神とされるご神木にまつわる意識調査を主とするものであった。幸田はYoun先生、ならびに運転手を務めていただいた演習林職員1名とともに各班の様子を順に見て回る。ある村落では、日本に生まれ育ち、終戦時11～12歳だったというご年配〔**写真9**〕が多く集う屋根つきの野外集会所〔**写真10**〕でごちそうを振舞われる。片言ながら、遠い記憶にある日本語や日本の歌を披露する方も。次々と酒食を勧めるそうした方々の「過剰なまでに親切な」もてなしの様子は、イメージ的に自分の祖父母や親せきと重なるような既視感があり、村落共同体が機能していた頃の、古き良き（？）時代の日本人の姿と酷似している点が非常に印象的であった。16時ごろには調査終了、バスで演習林宿舎に戻る。学生たちは夕食時まで、近くの沢で遊ぶ。18時から夕食。学生らは19時過ぎごろからこの日のアンケート調査の結果を統計解析処理する作業に入る。21時過ぎから班ごとに、解析結果をワーポイントによるプレゼン形式で発表する。実施の難易度の関係もあり、このプレゼンと応答に関しては韓国語のみで行われたが、日本人学生にも英語で話す機会が与えられた。

写真 9

写真 10

8/23（土）

この日はいつもより1時間早く、7時に朝食。ソウル大学の学生たちは7:40から演習開始だが、日本人学生にとっては最終滞在日であるため、朝食だけはご一緒しようとの先方の配慮から。日本人一行は再びKang先生、アシスタントの方とマイクロバスに乗り、8時出発でソウルへの帰路につく 20日と同様、高速に乗ってから両側に広大な栗林を見ながら、4時間以上の移動。昼食を含め、サービスエリア（SA）で休憩を2回とる。ソウル

市内に入ってから少し渋滞したものの、13時半には初日に宿泊したHFHにチェックインできた。

各自休憩後15時より、ソウル大院生・学部生の帯同で3時間のキャンパスツアーに連れて行ってもらった。キャンパス(冠岳キャンパス)内は広大で道路の勾配もきつく、かなりいい運動になった。各学部の建物や図書館、合格発表の際にマスコミ撮影が入る名所や広大なスタジアム等を案内され、いずれも規模の大きさに圧倒された。とある池のほとりのベンチ(デートスポット?)にて休憩した際には、立派なワッフルアイスクリームをごちそうしてもらった。北大農学部森林科学科に相当する「山林科学部」“Department of Forest Sciences, College of Agriculture and Life Sciences”が入っている、農学・生物学系の建物〔**写真11**〕では内部に入り、関係の研究室の外観を見て回ったが、野生生物の研究室では保存してあった野鳥等の剥製標本を見せていただいた。最初に向かった博物館はあいにく閉館であったが、美術館(Museum of Art)では三島由紀夫の「仮面の告白」(Confession of A Mask)の内容をモチーフとした展示品・絵画の鑑賞を行なった。広大なキャンパスの中では、循環バスが走り〔**写真12**〕、大学の予算が潤沢なのか多くのところで建物の新築・増改築が進行中であった〔**写真13**〕が、一方では、なお多くの木々(アカマツやカエデを中心とした豊かな緑)〔**写真14**〕や水遊びに興じる人たちが多く集まる小川もあり、豊かな自然環境を維持していた。18時から学生たちと教授連は分かれ、それぞれ

写真11

写真12

写真13

写真14

で会食した。韓国人教員メンバーはこの日非常にご多忙とのことで、幸田と会食を共にしたのはKang教授と森林(砂防)工学のIm Sangjun教授の2名のみであったが、過分の歓待を受けた。両教授とも、翌日早朝には出張予定が入っており、タイトなスケジュールの中で時間を捻出していただいたことに感謝したい。幸田は23時ごろにはHFHに戻り、疲労からかすぐに眠りにつく。学生たちも夕食後、先方持ちで2次会を楽しんだとのことであった。しかしながら、この日当初予定していた教員と学生の合流機会がなくなり、海外では自前のスマホや携帯に頼れないこともあって、翌日の予定に関し、幸田と日本人学生との間で意思疎通を欠くことになった。

8/24 (日)

学生たちは朝8時から、世話役の韓国人学生に連れられ、バスに乗ってソウル市内のいくつかの名所を見学した。幸田は9時ごろの出発を予想していたが、携帯電話もつながらない(料金がかかるため、学生側で海外使用可能な契約をしている者はいなかった)ため、そのまま先方の学生に日本人学生のお世話を全面的にゆだねる形になった。この点、次年度の引率対応に課題を残した。幸田自身は午前中、キャンパス内の、前日に案内されていない箇所を散策。HFHに戻って昼食後、今度は市街地に出てみることにした。

市街地での1日がかりの散策後、HFHで夕食。しかし、9時半を過ぎても学生たちは戻ってこない。よほど充実したご案内を受けている模様。世話役のソウル大学生には申し訳ない気持ち。お礼を直接言いたかったため、外の様子が見えるところで待つもなかなか戻ってこない。10時半を過ぎ、11時半を過ぎても戻ってこない。HFH本館前と自分たちの宿泊部屋がある別館とをウロウロ動き回ったこともあり、昼間の市内散策を含めると、この日に歩いた歩数は30000歩超。なかなかの運動量となる。0時まで待つことにするが、海外旅行が初めてという人もいるというのに、引率教員と連絡を取らないで日本人学生たち、翌朝の出発時刻について不安はないのだろうか(苦笑)。0時になり、シンデレラ・ボーイたち、時間切れ。自室に戻り、寝る前にロビーに電話をしてウエークアップ・コールをお願いしようとするも、そうしたサービスはないらしい。目覚まし機能付きの時計も部屋の中には見当たらない。仕方なく、購入したばかりの使い慣れない携帯電話のアラーム設定を使うことにする。これを試していたところ、0:17になって、部屋の戸外から呼び鈴が鳴る。ようやく帰ってきた学生たちに翌朝6:30のリムジンバスに乗ること、そのために20～30分前に起きて準備をし、チェックアウトを済ませておく必要があることを告げ、就寝。

8/25 (月)

アラームを待たず、5:30前に起床し、身支度。学生たちは朝寝坊していないか、念のため、各部屋の内線にこちらから「ウエークアップ・コール」を行なう。案の定、一組は危なかった(笑)。全員チェックアウトし、予定通り6:30のリムジンバスで仁川空港に。帰路、搭乗便が異なる学生がいることもあり、仁川空港にて学生の点呼を行ない、一応の解散をする。千歳到着組はすぐにチェックインし、出国審査のゲートを通過、時間までにお

みやげの購入を済ませる。韓国焼酎を購入した学生も多い。ウイスキーの値段はやや高めだったが記念に1本購入。「3本まで無税」との売り文句は興味深い。チョコレートは意外に高価につくことに注意すべき。無事に定刻通り千歳着、解散。千歳到着組以外の学生にはメールにて到着確認のメールを入れてもらうことにしていた。大学に戻ってこれをチェックし、全員の帰国を確認して、今回の実習も無事終了。

（教官会員）

続いて、学生の目から見た 2014 年度韓国実習の記録をご紹介したい。個人個人の感じ方からやや穏当さに欠けるような表現も一部に含まれるものの、当事者による原文を尊重し、「てにをは」に関する誤りの修正や注釈の付加は、必要最小限にとどめた。（幸田）

韓国実習報告　ー学生の視点からー

川村浩平、濱口広熙、豆野皓太、大上慧太、平野和貴、崎山智樹、菅井徹人、小松玄季、和田尚之、井川貴博、川尻啓太

8月19日　出発・ソウル大学到着　文責：川村

移動日。過去に多くの実習を経て、いい加減実習にも慣れてきた頃であったが、初の北海道外、ましてや海外での実習ということで期待と不安が入り混じった出発となった。14 時 15 分出発予定の便であったが、気合が入りすぎたのか 10 時過ぎには新千歳空港に到着。せっかくなのでラーメンを食べて時間をつぶした。その後手荷物預かりも出国検査もスムーズに終え、引率の幸田先生を含めた新千歳出発組で集まって出発までの時間を穏やかに過ごした。機内では映画を観て過ごした。機内食のクオリティの高さと、サービスの質の高さが印象に残っている。およそ三時間のフライトで、仁川空港到着。到着時、ソウル大学の学生二名と、先に別の便で仁川空港に到着していた北海道大学の学生の出迎えを受けた。その後、数名の学生は空港で日本円を換金、途中帰国予定の菅井は帰路の KTX の切符を購入。準備が終わったところで、リムジンバスでソウル大学内の宿泊施設（Hoam Faculty House；以下 HFH）へ向かった。バスの座席は幅広く、移動時間もあまり苦ではなかった。約二時間後、ホテルに到着。すぐにチェックインの手続きを行った。

同日　夕食　8月20日　移動日　文責：濱口

HFH 到着後、北大生側の「(現地で)焼肉を食べたい。」というオファーに応えていただき、空港から同行していただいている方々と共に HFH から徒歩 10 分ほどにあるサム

ギョプサル(=韓国焼肉)店で夕食をとる形となった〔**写真 15**〕。焼肉とはいえ肉の味付けに“タレ”は使わず、キムチやニンニクなどの付け合せの塩味とともにサンチュ(＝レタス)に巻いて食べるという日本のものとは若干異なった食文化であったが、やはり「おいしい」は世界共通認識なのであろうか、非常においしくいただくことができた。夕食後、大学構内のコンビニエンスストアを紹介してもらい、そこで翌日の朝食を用意してこの日は解散となった。

写真 15

20 日はあいにくの雨天であったが、この日は終日ソウルから南部演習林まで韓国を縦断する移動日であったことは不幸中の幸いであったといえる。チャーターしていただいたバスに乗って 6 時間、途中休憩をはさみながらひたすら南下していった。演習林到着後、すぐに夕食の時間となった。演習林で提供された食事は韓国の家庭料理であり、金属のプレートに乗るおかずが全て赤く〔**写真 16**〕、見た目通りの辛さゆえに完食するのがやっとであった。夕食後、歓迎会を兼ねて飲み会を開いていただき現地の学生と交流することができた。

写真 16

8月21日　講義「精英樹の探索」　文責：豆野

21 日は、演習林にある人工林を用いて簡易的な精英樹の決定方法を学んだ。測定項目は、胸高直径(DBH)、樹高、枝下高(LBH)、樹幹幅、樹幹幅/樹高、樹齢、枝の太さであった。樹幹幅/樹高は、樹高が高く樹幹幅が小さい樹木の方が、面積あたりに多くの樹木を植栽出来るために精英樹となる。今回の実習では、簡易的な方法ということで、DBH は輪尺で測定したが、樹高や LBH、樹幹幅は目測で行った。地面が傾斜になっていたことや樹高の計測の経験があまりなかったことから、目視での測定は非常に難しかった。また、測定に要する時間は、測高ポールを用いて行った測定とあまり変わらなかった。このような測

写真 17

定方法は、経験を積んだ人にとってはとても早く行えるのだと思うが、我々が用いる測定法としては向いていないと感じた。樹齢については、樹木を切り抜き(注:成長錐を使用)、年輪を読む方法で行った〔**写真 17、18**〕。本物の樹木を用いて年輪を読むのは初めてであった。よく写真等で見るようには、綺麗に年輪が見えず、とても苦労した。切り抜き方にも技術があり、年輪が見えるように綺麗に切り抜く難しさを感じた。北大での講義では精英樹について、太くなり、食害されにくく、風害などに強い樹木であることを学んでいたが、樹幹幅/樹高が小さくなれば、面積あたりに多くの樹木を植えられるので精英樹というのは、新しい見方であり面白く感じた。

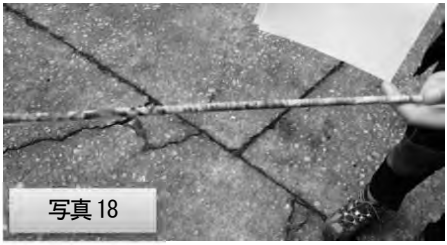


写真 18

同日　焼肉歓迎会　文責:大上

この日は曇天ながら天気に恵まれ、演習林宿舎裏の会場で野外バーベキューを全員で楽しんだ〔**写真 19、20**〕。演習林技術職員の方が炭火で大量の肉を調理してくださった。この日は野外演習で皆腹をすかしており、計20kgの肉が参加者の胃袋に収まったという。また、お肉以外にも様々なお惣菜、スイカ、桃などの果物も頂いた。特に、焼肉と合わせて食べるサンチュやコチュジャン、キムチは最高であった。参加者の雰囲気は、この実習で一番の盛り上がりを見せていたように思えた。特に、日本人学生と韓国人学生との間では、メウォヨパーティー(辛いパーティー)と題して激辛の獅子唐を枝豆のように食べ、お互いのあつい絆を確かめ合う行事が行われ、楽しいひと時を過ごした。もちろん、ソジュ(韓国焼酎)の存在を忘れてはいけない。ソジュは日本の焼酎にはない独特の香りとのどごしで度数も強いため、我々はソジュをビールで割って嗜んだ〔**写真 21**〕。学生間での会話は酔いのせいか、いつも以上に片言の英語で行われた。最初は、日本の食文化や大学に関する話題であったが、いつしか内容はプライベート

写真 19

写真 20

な方向性に変わっていった。特に、韓国人学生はすぐに「Do you have a girlfriend?」と聞きたがり、恋愛トークは日本と韓国共通で学生の鉄板ネタであると感じた。教授の方々も落ちついた雰囲気で、皆笑顔でお酒を楽しんでいるように思えた。このような最高の焼肉パーティーを準備してくださった方々に感謝したい。

写真 21

8月22日　一足先の帰国　文責：菅井

今回の韓国実習に参加した北大生の中で、菅井だけは、私用のため実習4日目の8月22 日に帰国した。変則的なスケジュールであるにもかかわらず、実習参加を認めて下さった幸田先生や快く受けて入れていただいたソウルの皆様に，この場をお借りして心より感謝申し上げたい。22日は朝食を済ませた後、光陽の南部演習林から順天まで送迎の車に一人揺られながら，ただ不安と焦りが募るばかりであった。順天駅に到着すると，そこには日本のようなプラットフォームに改札がなく電光掲示板を見上げる人々と窓口で切符などをもとめる人がごった返していた。韓国へ入国した際に購入しておいた切符もレシートのように薄い紙質であり，もちろん改札口があっても利用できそうになかったため，このような駅構造は好都合であったかもしれない．韓国の新幹線，KTX〔**写真 22**〕が順天から仁川国際空港まで直通で繋がったのは，ここ最近の工事らしい。空港に到着した後は入国同様の手続きであったために，手間取ることなく帰国できた。このように菅井にとってみれば移動時間がほとんどであったが，だからこそ演習林での行程は貴重に感じられた。海外で学べたことも踏まえ，記憶に残る実習であった。

写真 22

同日　講義「現地聞き取り調査」　文責：平野

朝食後、都合により先に日本に帰ってしまう菅井君を惜しみながら見送り、その後9:00 から森林経済学が専門の Youn Yeo-Chang 教授による講義”Traditional Forest Management in Mountains”を受けた。前日の講義同様に英語で行われたため、英語が苦手な自分は、耳はだいぶ慣れてきていたが苦戦した。ソウル大学の学生の様子を見ると物怖じしていない様子で、差を見せつけられたとともに、英語の勉強をしなければと思わされた。肝心の講義の内容は、林産物による伝統的な村落の経済・経営について

であり、Youn 教授が講義冒頭で北大の柿澤教授の名前を挙げていたように、森林政策などの講義に通ずるものであった。ここまでの実習ではソウル大学の実習に参加しているというよりも傍観しているという感じだったので、講義途中で日本の学生に質問を振ってくださるなどの教授の心遣いがありがたかった。講義終了後 11:30 に、講義内容を踏まえた村への聞き取り調査へ出発した。6 班に分かれてそれぞれが別の村落へ行き、村落の住民に対して、村落にある森林や御神木についてどのように思っているか、それを家族構成や所有する土地(家や農地、森林)の広さ、学歴やその村落で産まれ育ったかなどとともにアンケート調査した。村に到着し、まず木造の立派な集会所で昼食(弁当)を食べた。集会所の建築費用は覚えていないが、結構な額で驚いた記憶がある。昼食後、自分のペアは村にある神社？らしき建物の方向へ。初めに行ったお宅では、家主に相方のソウル大学生がアンケート調査を行うが、中々苦戦している様子。聞いてみると家主は酔っているようであった。結局アンケートは途中までしかできていなかったが、もっと先に進んだところに人が居るとのことでそちらへ向かった。次のお宅は家族でバーベキュー中であり、相方が自分を日本から来た大学生だと紹介してくれると、「食べて行け」とのことで、昼食後すぐにも関わらず、バーベキューにお邪魔させていただくことに。自分が連日のサムギョプサルを頂いている間に相方がアンケートを行った。その家族はその村には住んでおらず農地だけが村にあり、農業をしに村に来ているとのこと。きのこ栽培のハウスがあったのだが、1 ha もの広大な農地できのこや野菜を栽培しているということだった。アンケート調査を終えた後(自分にとっては十分に食事を頂いた後)、次のお宅へ移動をしたのだが、人が不在なので出発した集会所へ戻ってみると、村の人たち(おばあさんたち)が集って宴会をしていた。人が居ない訳である。自分が日本から来た大学生だと引率の教員の方に紹介して頂くと、御馳走を出していただくなど大歓迎を受ける。ほとんどの方が幼いころに日本語を習っているようで、日本語で挨拶してくれたり、知っている日本語を話してくれたり、中には「かわいい顔してますね」と日本語で言ってくれる方も。とても気分が良く居心地が良かった。また、日本語名を持っている方や、覚えている日本の昔の歌を披露して下さる方、新潟出身で戦争中に韓国に移住してきたという方などもいらっしゃった。豚の頭や焼酎などをもてなされるがままに食べたり飲んだりして、自分はひたすら飲んで食べて飲んでしかいないなと思っていた所、幸田先生がいらっしゃって、これまでの経緯を話したところ、「現地の人との交流も大事だよね」とありがたいお言葉を頂き、余計に箸が進んだ。調査終了後、帰る際も温かく見送っていただいた。最初は、年配の方々などは反日感情があって、中々受け入れてもらえないのではないかと思っていたが、村落に行ってみると、とても親切で温かいおもてなしを受け、非常に嬉しく、ありがたかった。見ての通り、食べて飲んでしかいないかもしれないが、中々普通の旅行などで地方の村へ行き、現地の色々な人と交流するということは経験できないと思うので、非常に良い経験になったと思う。また、古き良き日本

ではないが、そのような雰囲気を感じられて心が温かくなった。

同日　川辺にて交流・プレゼンテーション　文責：崎山

たった数時間の村への聞き取り調査では日本語を発する機会がなかったためか、宿舎に戻るだけで日本語を使える安心感があった。そんな中、韓国の学生から川に泳ぎに行くかとお誘いを受けた。なんのことかわからないままバスに乗ると、実習所の目の前を流れるのどかな川に辿り着く。体を動かすのが好きな連中が集まっていたこともあり、はしゃぐ準備はできていた。だが、川遊びがいくら好きでも、まさか韓国で上半身裸になり、韓国の学生より先陣を切って川に入ろうとはなれなかった。そこで何の躊躇もなく川に全身浸かりに行ったのが、Youn 教授だったのだ。その様子を見て、我々は川に安心して飛び込み、結局はしゃいだ。水切りを韓国の学生に教えたり、投げ入れられる差し入れの桃をキャッチして噛り付いたり、「集中砲水」を喰らったり、どれも最高に楽しかった〔**写真 23、24**〕。

写真 23

写真 24

夕飯を食べた後に待っていたのは、聞き取り調査についてのプレゼンだった。結論からになるが、プレゼンは韓国語スライドの韓国語による発表で行われた。つまり、この日の聞き取り調査からプレゼンまで、私たち日本人が理解できたことはとても少ないと言えるだろう。この点で、私は何も理解できなくて悔しいと思うと共に、もう少し日本人の理解に配慮した韓国人の対応が欲しかったとも思った。何人かの日本人は韓国の村についての印象を英語で発表する機会が与えられただけ嬉しかった。

これが実習所の最後の夜だったので、北海道のお土産を渡した。北大のクリアファイル、北大の手ぬぐい、クラーク博士のストラップだ。翌朝に大事な試験が控えていたにも関わらず、その後の宴会も長く続き、かなり盛り上がった。果たして、試験結果はどうだったのだろう。試験前にも関わらず、とても楽しい時間をありがとう。

8月23日　移動日・ソウル大学散策　文責：小松

あくる23日、ソウル大の学生は別の場所で樹木同定テストがあるらしく、8 時半ごろに宿舎を出発していった。続いて北大の学生も、演習林の職員さんに見送られて宿舎を

後にしてソウルへ向かった。風景は日本と大きくは変わらない。何度か線路と交差したが、個人的には韓国の列車にも乗ってみたかったと思う。バスは渋滞もなく北上し、昼にはソウル市内に入ったらしく車の量も多くなってきた。サービスエリア(SA)で昼食休憩を取るが、往路のSAでの辛すぎるビビンバがトラウマになって僕はうどんを選ぶほかなかった。醤油の味が懐かしい。

ソウルに着いてファカルティハウスにチェックインしたあと、ソウル大の学生・先生と合流して構内の案内ツアーが始まった。改修工事中の図書館を通り、事務棟の前で写真を撮って、北大でいう大野池のような池のほとりでアイスクリームをごちそうになった。ソウル大は広い。起伏があるから歩き回ると結構な運動になるし、道が曲がりくねっているからどこにいるのか分からなくなる。たどり着いた立派な建物は農学部で、動物生態学？の研究室があるらしく北大生は羨ましがっていた。最後に美術館を見学して、街へ下りて夕飯(タッカルビ)を食べに向かったのだった。

8月24日　ソウル観光午前の部　文責:和田

24日、実習6日目、天気快晴。この日は1日ソウル観光であった。8時30分にソウル大学の学生と宿舎前で待ち合わせし、一緒に学食で朝食を済ませた後、ソウル大学正門前のバス停からバスに乗り、観光に出発した。午前中は歴史的建造物を見て回ることにしていた。最初の目的地である景福宮は朝鮮王朝時代の正宮として建てられ、現在も奥に大統領府がおかれるなど韓国の政治の中心である。しかし、独立後に再建されたため比較的新しく色鮮やかな感じがあった〔**写真 25**〕。次に徒歩で宗廟を訪れることにしたが、宗廟に入場の時間制限があることが判明。走らなければ間に合わず、急きょ宗廟訪問を断念、隣の昌徳宮を訪れることにした。しかし、ここでも事件が発生。H 氏が軽い熱中症を患い、ダウン。先に休息を兼ねて昼食をとろうとしたが、近場にめぼしい飲食店がなかったため、しかたなくH氏には近くのカフェで休んでもらい、その間ほかの面々は昌徳宮を見学することにした。

写真 25

昌徳宮は景福宮の離宮として建てられ世界遺産に登録されている。個人的には秘苑も見て回りたかったが、時間的余裕や別途料金が必要なことなどから今回は断念した。宮殿のつくりは景福宮と似ていたが、外観や装飾などから歴史の古さや朝鮮王朝の繁栄ぶりを見て取れた。昌徳宮見学後は昼食に向かったが、2度あることは3度あるとはよく言ったものでまたもや事件発生。昼食予定地が定休日だったのだ。観光にはトラブルがつき

ものだが、午前中だけで3回も見舞われるとさすがに無事に宿舎に戻れるか心配である。

同日　ソウル観光午後の部　文責：井川

私たちは、ソウル大学の学生たちに連れられてランチにいくことになった。最初は参鶏湯を食べようとしていたのだが、お店が閉まっており入れず、チゲ鍋を食べられるお店に変更となった。真っ赤なスープですごく辛そうではあったが、うまみが強い芳醇な香りのスープであったし、具に入っていたスジっぽい肉の程よい歯ごたえも相まってとてもおいしかった。次にバスで様々なお土産屋が立ち並ぶ地域に移動し、自由行動となった。たしかにいろいろなものが置いてあったが、明らかに偽物っぽいシャネルのパチ物などが並んでいるお店などがあり、アトラクション感覚で見て回った。また、散策中にのどが渇いたため、水分補給をしようと飲み物を売っている場所を探したがなかなか見つからないので、屋台のペットボトルを買うことにした。しかし、一本 5000 ウォンという破格だったのであきれ返ったが、日本人はお金を持っているという見栄を張るために購入してあげた。そして、自由行動の後、集合してトッポギのチゲ鍋を食べに行った。トッピングをいろいろ選べたし、〆に残ったスープのタレでつくった焼き飯(私はあれをチャーハンとは認めない)が格別であった。腹ごしらえも済み、最後にソウルタワーへ向かった。ソウルタワーは山頂付近にあるのだが、麓で降りて、400mほどの登山が始まった。正直、私には苦行でしかなく、歩きながら隣を通り過ぎていく何台ものバスを恨んだ。そして到着したと思いきや、最後の最後にほぼ崖ともいえるような急こう配の坂が出現。アホではなかろうか。観光地にあのような坂をそのまま舗装しておく神経がわからない。階段を設けるなり、もっと緩やかになるようなカーブにするなりできただろうに。ひざは笑っている。肺はわたしに酸素を補給するためにフル稼働。心臓は私の胸を叩き割り、飛び出しそうだ。地獄の苦しみを味わいつつ、何とか頂上へ。そして売店を見つけて水を 1.5L 一気に飲み干した。もう二度と登るものか。私の決心は固い。その後、とても早いらしいエレベーターにのり、ソウルタワーの展望階へ。エアメールで愛を伝えるコーナーがあって私は肩身の狭い思いをした。あいにく私にはそのような人はいないのだ。かわりに一人でお菓子コーナーの崎山くんおすすめのお菓子を購入し、一人で食べていた。その後、バスにのり、途中のバス停でソンヨプ君と別れ、ソウル大学前のバス停で下車。その際、案内してくれた女学生とも別れた。そしてそのバス停から 20 分ほど山登りをして宿泊先のホテルへ帰った。その際、学生の彼がひとり最後まで一緒にいてくれて、とてもうれしかった。別れを惜しむ挨拶をし、ホテルの自室に帰り、途中で買ったコーラを飲みつつお気に入りのブログをチェックしたのち、眠りについた。

8月25日　帰還　文責：川尻

朝 6 時半のバスに乗り、空港へ。行きと同じくひとり 15000 ウォン。睡眠不足を補うようにバスの中では寝てしまい気が付くと空港についていた。学生 10 人のうち1人は成田

へ、3 人は関空へ、それ以外の僕を含めた 6 人と幸田先生は 10:10 仁川発の大韓航空 KE765 便で新千歳空港へ。少し手こずる人もいたが問題なく出国手続きを済ました。保安検査場を過ぎると多くの免税店が並ぶ。ほとんどの人がここでお土産を購入した。キムチ、韓国のり、コチュジャン、ソジュ、チョコ菓子など韓国らしさあふれるお土産を手いっぱいに飛行機に乗り込むのであった。3 時間弱のフライトの間は映画を観て過ごした。使用していないが J-pop も含めたオーディオ機能や邦画も鑑賞できた。となりの女性は韓国人であったが日本語がお上手で、かつて日本に留学していたそうだ。窓際の僕と客室乗務員とのコミュニケーションの補助をしてくれた。新千歳空港に着陸すると、ついさっきまで海外にいたことを忘れさせるような見慣れた風景が広がっていた。入国の際は、1 週間前に新千歳で出国手続きをしてもらった人と偶然同じ人に手続きをしてもらった。ゲートを出ると、いつ換金をするかで迷った。1 週間前の出発時とレートが大きく変わっており円で損をする状況であった。結局空港内で換金することにした。僕は 4 万円を韓国でウォンに換金し、それをほぼすべて韓国で使い果たして帰国した。その後それぞれ家路につき、韓国実習に幕を閉じた。

海外での実習を、小松が自分のお腹と井川のメガネを壊したこと以外、無事に終えられたことをうれしく思います。最後になりましたが、引率の幸田先生、韓国でお世話してくれたソウル大学の学生、教員のみなさんに感謝します。

年年歳歳、歳歳年年

本橋　紘

「年年歳歳 花相似たり 歳歳年年 人同じからず」 年齢を重ねるにしたがい、近年、このことばに対する想いが強くなりつつあります。このことばと同じ意味合いのものとして“花はいっとき 人はひと盛り”があります。小生の年齢は今年七十五歳、「後期高齢者」の仲間入りです。「後期高齢者」という呼称は、世間的にはあまり歓迎されていないようです。多分、「後期」という語の響きのせいでしょうが、小生は必ずしもそうは思いません。むしろ逆で、「好機」と捉えています。長く生きてきた分だけ知的な蓄積は多くなっているものと自負しています。

人間にとって大切な一つの知恵は諦めることでもあり、諦めることは成熟なのです。ちなみに、「あきらめる」の語源は、「明らかに究める」に由来しています。最近の小生は「諦観→達観」の心境です。人生は、そのときになってみないと分からないことが多いものです。だから、そのときまでは、いつでも適当に思っていればよいのです。「棺を蓋(おお)いて事定まる」です。

さて、小生の余暇の過ごし方は、「競馬」と「読書」です。若いときからの趣味が高じてというのが「道楽」で、老い入りをしてから緩やかに趣味を続けるのが「三昧」じゃないでしょうか。その伝でいえば、まさにこの二つは三昧です。競馬は、「人の行く裏に道あり花の山」を信じつつ、いまだに花の山を探し求めている次第です。一方、読書は、人間の創造した最も価値の高い快楽の一つであると思います。

読書に関しては、二十歳の時分から、本の中で共感(共鳴)する箇所があったら、それをノートに書き写す習慣を現在も続けております。したがって、そのノートもかなりな部数になります。このノートのタイトルは「オレ流箴言集」と名付け、いまでも折に触れ眺めては、悦に入っています。内容は、大仰に言えば人生哲学や人生訓であったりして、小生にとっての自戒のことばとして受けとめてきたことは否めません。

そんなわけで、この「オレ流箴言集」の中から、印象的なものを無秩序に抽出し、以下に列記しますのでご笑覧ください。

・人の諸々の愚の第一は、他人に完全を求めるということだ(「竜馬がゆく」)。
・自分の体験や経験を絶対の根拠としたがる傾向が、読書嫌いの人には時々見受けられる。 こうした自己の体験至上主義は、狭い了見を生む(岩波新書「読書力」)。
・大人は齢をとればとるほど、若者に対して文句を言う。それが当然で、もし、全然文句を言わない大人がいたら、その人は若さを経験してこなかったことになる。若者よ、齢

とった者には文句を言わせておけばよい。しかし、片方の耳でその言葉のひとかけらを聞き、片方の目でその生き方を見ておいても無駄にはなるまい(「どくとるマンボウ青春記」)。
・「寒いね」と話しかければ「寒いね」と応える人のいるあたたかさ(「サラダ記念日」)
・頭の空の人間ほど議論を好む(古きユダヤの賢者)
・精神の中にわずかでも糖分がなければ、人間は1日も生きられない(司馬遼太郎)。
・人生は短いが、今、プラットホームを発車しようとしている電車にどうしても乗らなくてはならないほど短くはない(高橋義孝)。
・何でもかんでもよく見えるより、少しばかり目先がかすんでいるくらいの方が渡りやすいのが世間という橋である(宮部みゆき「ぼんくら」)。
・六十を過ぎると、自分が世の中から離れていくんじゃなくて、世の中の方がだんだん離れていく(深沢七郎)。
・後悔を先に立たせて後(あと)からみれば 杖をついたりころんだり(都都逸)
・人生はおおむね次の二つのことから成り立っている(ゲーテ)。
したいけれど できない
できるけれども したくない
・今日という日は残りの人生の最初の日
・老人は生き生きしているよりは、イライラせずにニコニコしている方がいい。
・I must change to remain the same.
・物事というのは、慣れて呼吸がわかる頃に終わりを迎えるようだ。
・生かされて愚痴は言うまい日々新た
・ユーモアの源は、”いったん自分を状況の外に置く”という余裕。

＜川柳＞
・改革の最後は政府民営化
・立ち上がる何で立ったか考える
・方丈記判る頃には介護四
・歯科眼科泌尿器科で幕が降り
・病院の待合室はみんな医者
・百歳は何をやっても健康法
・理屈というのは、相手を説得はできても納得させることは難しい(藤原正彦)

＜長寿の心がまえ＞
・人生は六十から
・七十にしてお迎えあるときは、「留守」というべし

・八十にしてお迎えあるときは、「まだまだ早すぎる」というべし
・九十にしてお迎えあるときは、「そう急がずともよい」というべし
・百にしてお迎えあるときは、「時期をみてこちらからぼつぼつ行く
・経験は最良の教師である。ただし、授業料がめっぽう高い(カーライル)。
・努力とは馬鹿に与えた夢である。未来とは修正できると思っている過去(談志)
・「世間は生きている。理屈は死んでいる。」(勝 海舟)
・いいことも悪いことも長くは続かない、これを無常という。
・「わが仏 隣の宝 婿舅 天下の軍(いくさ)人の善悪(よしあし)」(牡丹花肖柏)
　註:人が集まるところで口にしてはならぬ話題

以上、縷々述べてきましたが、蟄居老人である現況の小生は、次の歌のような心境です。「たのしみは 心に浮かぶはかなごと 思い続けて煙草喫うとき」(橘 曙覧(あけみ))されど、 Old soldiers never die, they just fade away.

(昭和41年 林学科卒)

厚沢部町の魅力紹介

水本　絵夢

私は現在、檜山郡厚沢部町の教育委員会に所属し、町内にある土橋自然観察教育林（以下、教育林）というところで教育林コーディネーターを勤めております。主に教育林の活用（ガイドや環境教育など）と管理（遊歩道・林内整備など）についての業務全般を受け持っています。

厚沢部町は、ヒバ（ヒノキアスナロ）という樹木の分布北限、そしてトドマツの分布南限の付近に位置しており、北海道の中でも独特な自然環境を有しています。特にヒバは檜山地方には所縁の深い樹木で、江戸時代にはヒバの材が松前藩の大事な財源となっていました。そんな歴史あるヒバの豊かな森が教育林には多く残存しており、中でも「ヒバ爺さん」の名で親しまれているヒバの大木が有名です。一説によると樹齢 600～700 年ともいわれています。

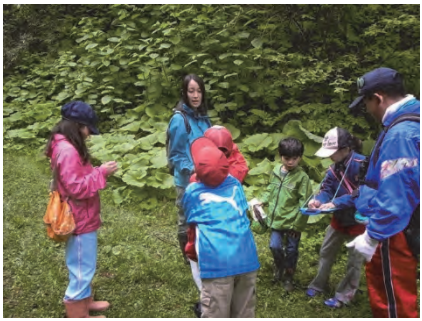
また教育林にはヒバ林の他にも、ブナ・ナラ・カエデ類やトドマツ主体の針広混交林、ミズバショウなど水辺植物の豊かな湿地帯、そして外国樹種から自生種まで実に多くの樹種が植栽されている樹木見本林もあり、教育林を一回りするだけで実に様々な植生をみることができます。町内の方が教育林を「幕の内弁当」のようだとおっしゃられていましたが、全くその通りだと思います。

このような教育林の魅力を少しでも伝えられるよう、月末の定例自然観察会の開催を始めました。参加者は町内町外問わず、様々な方が参加できる会となっており、毎回テーマを変えながら野外での自然観察や自然工作などを行っています。テーマはシダ植物や粘菌を対象にした回から、紅葉狩りやハイキングを楽しむための回もあります。教育林内を流れる河川について、乾燥化防止のための河畔林づくりを目的とした植樹も観察会内で行いました。町内の方を講師にお招きし、草木染めを行ったこともあります。町の自然を楽しむだけでなく、環境保全事業を町内の方々と一緒に行う機会や、町内の方々が活躍する場としても自然観察会を利用していけたらと考えています。

今後は活用面では子どもたち向けに木育イベントの開催、教育林の管理面では林内のヒバ人工林の調査等を企画しています。地域の自然の魅力を発信し、そして様々な情報を集積する場所にしていけたらと考えております。

以上、私が現在厚沢部町で行っている業務内容の一部をお話させていただきました。ほとんどが厚沢部町教育林のご紹介になってしまいましたが、地方で働く際には、その土地に自分自身が魅力を感じることが一番大切かと思います。近くにお越しの際には、農業が盛んで自然豊かな「世界一素敵な過疎の町」、厚沢部町にぜひ立ち寄ってみてください。

（平成 21 年　森林科学科卒）



［写真］左：ヒバ爺さん、右：定例自然観察会と草木染め

第69回・第７０回　シルバ会ゴルフコンペ

長岡　宗男

まだ夏の名残の暑さを感じる9月６日(土)に第70回シルバ会コンペが開催されました。私は、2年前に退職して札幌へ戻り、今回が初めての参加でしたが、ビギナーズラックとでもいうのでしょうか、思いがけない優勝となり、また同時にシルバ会へ寄稿せよという名誉(？)に授かりました。

当日の参加者は9名と少なく、寂しい感じがしましたが、参加者の皆様はゴルフを心から楽しんでおられる様子で、私も楽しくラウンドさせてもらいました。夕方から用事があったために早めに失礼しましたが、食事をとりながらもっと歓談したかったと思っています。

このコンペは今回で70回という節目になりましたが、参加者の年齢層が私を含めて高齢化しているので、もっと若手が参加して、会をさらに盛り上げていただければと思います。

また、来年皆様とゴルフができることを楽しみにしております。

（昭和47年　林産学科卒）

第６９回　北大シルバ会ゴルフコンペ成績表

と　き:平成26年5月17日（土）

ところ:ツキサップゴルフクラブ

順位	氏名	卒業	OUT	IN	計	ハンデ	NET	その他の表彰
優勝	藤川清三	産44	47	48	95	19.2	75.8	DC,NP
準優勝	葛西公尚	林40	48	45	93	16.8	76.2	BG,DC
1位	濱田　革	林60	61	60	121	44.4	76.6	
2位	北條雅也	林42	58	50	108	30.0	78.0	
3位	馬男木紘	林41	56	54	110	31.2	78.8	
4位	渡辺崇彦	林42	49	49	98	18.0	80.0	
5位	馬場敏彰	林37	51	59	110	30.0	80.0	NP
6位	拝野昌明	産44	63	52	115	33.6	81.4	
7位	渡辺明美		48	54	102	20.4	81.6	NP
8位	拝野悦子		60	57	117	34.8	82.2	BB
9位	椿谷信雄	産56	61	54	115	30.0	85.0	

競技方法:ダブルペリア方式(打数制限なし)

BG(ベスグロ)、DC(ドラコン)、NP(ニヤピン)、BB(ブービー)

第７０回　北大シルバ会ゴルフコンペ成績表

と　き:平成26年9月6日(土)

ところ:ツキサップゴルフクラブ

順位	氏名	卒業	アウト	イン	グロス	ハンデ	ネット	その他の表彰
優勝	長岡宗男	林47	48	49	97	21.6	75.4	NP
準優勝	渡辺明美		47	49	96	20.4	75.6	NP
1位	葛西公尚	林40	45	43	88	12.0	76.0	BG,DC
2位	八丁博成	林41	49	50	99	21.6	77.4	
3位	渡辺崇彦	林42	49	47	96	18.0	78.0	DC
4位	藤川清三	産44	51	47	98	19.2	78.8	
5位	馬男木紘	林41	53	51	104	25.2	78.8	
6位	本橋　紘	林41	73	61	134	50.4	83.6	BB
7位	北條雅也	林42	55	53	108	24.0	84.0	

競技方法:ダブルペリア方式(打数制限なし)

BG(ベスグロ)、DC(ドラコン)、NP(ニヤピン)、BB(ブービー)

お知らせ

○ 平成27年度シルバ会ゴルフコンペのご案内 (予定)

日時　第71回(春) 平成27年5月16日(土)　9時頃スタート
　　第72回(秋) 平成27年9月5日(土)　9時頃スタート

場所　ツキサップゴルフクラブ
　　札幌市豊平区有明412-5　Tel 011-881-6701

以上ご案内します。多数のご参加を待っています。

幹事　北條　雅也　(42林学)　Tel 011-552-2780
　　藤川　清三　(44林産)　Tel 011-572-7150

第69回 北大シルバ会ゴルフコンペ

第70回 北大シルバ会ゴルフコンペ

東京シルバ会について

増山　寿政

東京シルバ会は関東周辺に在住の林学科、林産学科、森林科学科等に在籍していた卒業生、修了生、教官で構成しており、毎年4月に総会を開催しています。昨年4月5日には、東京都千代田区の法曹会館で平成26年度総会を開催し、初めて参加する会員を含めて35名が出席しました。また、北大からは札幌林学同窓会会長で農学研究院環境資源学部門の小泉章夫准教授に遠路はるばるお越し頂きました。

開会に当たって、昭和50年林学卒の梶谷辰哉会長からご挨拶、乾杯のご発声を頂きました。その後、小泉准教授から関係学科の近況等についてお話を頂きました。

最後は、大先輩から平成21年卒の若手までの皆で円陣を組んで恒例の「都ぞ弥生」を熱唱しました。年に一度の旧交を温める機会となり、来年の再会を誓いながら盛況のうちに閉会となりました。

本稿の掲載時期には、平成27年度総会（今年4月10日開催）も終わっているころかと思いますが、関東近郊にお住まいの皆様の、職場などの域を越えた幅広い交流の場として、来年以降も東京シルバ会を引き続き開催していく予定ですので、どうぞよろしくお願いします。

（平成7年　林学科卒）

札幌シルバ会から

幸田　圭一

シルバ会会員の皆様には日頃よりシルバ会の活動にご支援賜り、厚く御礼申し上げます。2014 年1月の総会から総務担当になりました。総会が次回から6月開催に変更されたことにより、通常よりもやや長い任期を務めますが、どうかよろしくお願いします。恒例により、近況を簡単にご報告致します。

今期の役員は、二年目の小泉章夫会長をはじめとして、林学科・林産学科・森林科学科 OB と現役の教員からなる 12 名の幹事、2 名の監事の、計 14 名で務めております。総務は昨年に引き続き、准教授・講師層を代表して幸田が担当しております。会計担当は、今回の総会(2015 年6月開催)をもって助教層の代表である重冨顕吾先生から交代しますが、本原稿執筆時点(2015 年 2 月)では後任は未定です。森林科学科では、2 名の助教の公募人事が動き出しており、旧林学系と旧林産系に各 1 名ずつ、久しぶりに若い先生方を迎えられることになるのではないかと期待しております。また、学生に関わる行事の運営は、院生会幹事の大学院生(2名)が中心となって行っています。

シルバ会の主な年間行事は、2 月の卒論・修論発表会の直後に開催される予餞会の開催(補助)、春と秋のゴルフコンペの開催、総会の開催時期変更に伴い 4 月に変更された同窓会誌「シルバ」の発行、5 月の新入生歓迎ソフトボール大会とジンギスカンパーティーの開催(補助)、それと6月になった総会の開催です。また、これらに向けた準備のため、年 2 回の幹事会を開催し、適宜、実務レベルでの打ち合わせを行なっております。

2014 年の新歓ソフトボール大会は、5月29日に美香保公園にて開催されました。この日は天気に恵まれ、また、けがや事故もなく試合を進めることが出来ました。昨年に引き続いて優勝、準優勝をそれぞれ 3 年生と 2 年生が占め、若い学部生の力を見せつけました。また、3位は森林生態系管理学研究室となりました。2015 年も 5 月末に開催を予定しています。

さて、次回の総会・懇親会についてご案内致します。本誌に綴じ込んだ葉書にも記載の通り、2015 年(平成 27)年 6 月 12 日に三越デパート別館 4 階ライラックの間にて、総会と懇親会の開催を予定しております。本年は金曜日の開催になります。1月開催よりも季節がら、より多くの方にお集まりいただけるのではないかという趣旨で、前回の総会の場で変更が承認されました。旧交を温めるために、より多くの会員の皆様に総会ならびに懇親会にご参集頂けるよう、お願い申し上げます。

最後に恒例により、名簿に関する業務連絡をさせて頂きます。以前にもご案内致して

おりますが、シルバ会では旧林学同窓会当時とは異なり、名簿の管理については学科単位ではなく、農学部の同窓会組織（札幌農学同窓会）に一任しております。そのため、札幌同窓会会員として年会費を納めることでシルバ会会員を含む名簿が入手できるようになっております。なお、住所変更など会員異動の連絡が必要になりましたら、会誌に綴込んである総会・懇親会の出欠を回答する葉書に「会員異動届」と明記した上で変更内容をご指示ください。シルバ会総務担当者から札幌同窓会に名簿記載内容の変更を手配することができます。ただしこの場合は、会員異動届と明記されていないと対応できませんのでこの点、御承知おき下さい。インターネットが利用可能な環境にいらっしゃる会員におかれては、札幌農学同窓会のページ（http://www.alumni-sapporo.or.jp/）内にある、会員名簿等各種届のページ（https://ssl.rainbow.ne.jp/~s181/meigihenko.html）から、各簿登録事項について各自でご入力いただけば、個人情報の変更が可能です。名簿への掲載可否についても、項目ごとにご本人のご要望を反映させることができます。異動情報等を名簿に反映されていないシルバ会会員がお近くに居られましたら、この点、お伝え頂ければ幸いです。近年、個人情報の保護は大きな社会問題となっております。お手元の名簿の管理（保管や廃棄）につきましてもご留意頂きますよう、会員の皆様方にもご協力をお願い申し上げる次第です。

会員の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

（教官会員）

道庁シルバ会報告

赤間　隆

26年6月3日に道庁シルバ会やりました。「シルバ会あるから出て下さい」「沼田さんが赤間が来ないなら出ないって言ってる」という根部谷局長の優しい脅しに「行きません」と答える選択肢はありませんでした。

シルバ会というものに出るのはほとんど記憶にないほど久しぶりだけど、まだ若い頃に札幌市内のホテルで二百人規模ぐらいで宴会をやり、前口上付き都ぞ弥生の大合唱で閉めたのを覚えている。退職してまだ数年の千廣元林務部長が来られていて、つまりそういう年代でした。たぶん、あれは札幌近郊の関係者が職種を問わず集まったものだろうけど、「札幌のシルバ会」といえばそういうイメージです。なので、二十名前後が集まって居酒屋の小上がりで開かれたこのたびの道庁シルバ会は、随分こぢんまりしたものに感じられました。

さて、会の趣旨は25年度でめでたく道庁を退職された沓沢、松尾、荒川各先輩と沼田君の慰労会でした。同期である沼田君を含めて、年代的に極めて近い顔ぶれなので、自分の年齢をしみじみ感じてしまう。

趣旨はさておき、全体的にはごくフツーの飲み会のノリで進行したので、宴の半ばで主賓4名に贈られた記念品の紹介をし、道庁シルバ会の報告に換えたい。

昔話にちなんだ、大きいつづら、長いつづら、広いつづら、小さいつづらの4つのつづらに見立てた包みが用意され、その中身は以下のようなものでした。

大きいつづらは、特別純米酒『ポプラ並木』500ml 1本。北大研究林に湧出する清水と構内農場で栽培された米「きらら 397 」を使用、「米の旨みを十分に引き出したふくよかな香り、云々…」というふれこみで、松尾先輩に当たりました。一部では「のんべに当たったね」という声も。

長いつづらは、北大構内のハルニレ（エルムという呼び方が懐かしい）で作ったお箸と、マイ箸をどこでも携帯して使えるお箸袋。これは沓沢先輩がゲット。

あとの二つは誰が何をもらったのかの記憶が非常に曖昧なので違ってたらごめんなさい。

広いつづらは、北大オリジナルのマフラータオル（そんなものがあったんですね）と 16 年台風で倒れたポプラ並木のポプラで作ったストラップ。ストラップはミニサイズの黒板消しの形で携帯電話の画面を拭くことができるとか。荒川先輩が入手してさっそくタオルを首に巻いていたような気がします。

最後に、人間のサイズでは一番大きい沼田君の手に渡った小さいつづらは、やは

り北大構内のハルニレで作られたシャープペンでした。

なんだか北大生協の宣伝のようになってしまいますが、今はオリジナルグッズも色々あるのですね。これも独立行政法人化や少子化に伴う大学経営の厳しさの現れなのかもしれません。

最後は主賓四人の挨拶で締められたのですが、四人目に若干ろれつが怪しくなった松尾先輩のあいさつがそのまま宴の締めとなり、和やかな宴は無事終わりました。

（昭和54年　林学科卒）

シルバへのひとこと

―― 話は1年前にさかのぼる。仏語圏アフリカの某国へ行った私は、ゴリラの研究成果発表会で挨拶をすることになった。ここは一発笑いをとらないといけないと考え、あれこれ試案したが、下手な小話がすべると通訳さんに申し訳ないので、この際シャンソンを歌うことにした。「人生は美しい」という往年の名曲のサビの部分を、「ゴリラは美しい」に変えたのである。予定の原稿を読み終えたところで、北大で3年かけてみっちり学んだ仏語で「最後にゴリラの歌を歌います」と言って…

Pouvoir encore regarder （私はまだ見ることができる）
Pouvoir encore ecouter （私はまだ聞くことができる）
Mais surtout pouvoir chanter （だがなんといっても歌うことができる）
Que c'est beau ,c'est beau les gorilles… （素晴らしい、ゴリラは素晴らしい…）

そこそこの拍手をいただき、うけたと思ったのだが、実は日本人にもガボン人にもさっぱり理解されていなかった…

これは名誉挽回をせねばと、機会を伺っていたところ、昨年12月に南米の某国で開催された国際会議のサイドイベントでチャンスが回ってきた。「森から世界を守る REDD+プラットフォーム」の紹介をすることになり、最後に「アナ雪」のレリゴーの替え歌を熱唱した。

Don't let it go, don't let it go
Can't deforest anymore
Don't let it go, don't let it go
Reverse and stop emission
We must care
What we're going to do
Let's join the Platform
Reducing emissions from deforestation

飛行機の中で、アナ雪のこの場面を何度も何度も再生して練習したおかげで、今度は大好評であった。有名な曲で、ちゃんと歌詞をスクリーンに投影したのがよかったようだ。調子に乗って職場の忘年会でも披露した。

さらに、毎週水曜日の職場のノー残業デーのリマインド当番の時にも、レリゴーの替え歌を使ってみた。

The papers glow more on my desk tonight
Not the last page to be seen
A kingdom of workaholics, and it looks like I'm the Queen
The mails are howling like this swirling storm in PC

Couldn't finish them; Heaven knows I've tried

Don't let me out, don't let me back
Be the hard worker you always have to be
Continue, don't rest, don't go back home
Well now I go home

Let's go home, let's go home
Can't over work any more
Let's go home, let's go home
Turn away and slam the door
I don't care
What they're going to say
Let my bosses rage on, the works never bothered me on Wednesday

こちらはまだメールで送っただけなので、いずれ職場の懇親会で熱唱しようと、虎視眈々と機会を伺っている。乞うご期待！

（五関　一博　昭和62年　林学卒）

―― この4月、2年前に他界した父の遺骨を埋葬した。母や生前の本人の希望を入れ、雲取山が望める東京都奥多摩の樹木葬墓地である。埋葬地には桜のシンボルツリーが植えられ、納骨の日は満開の花が美しかった。遺骨は直に土に埋められ、いずれ土に還る。墓参りはなかなかできそうにないが、桜や山の景色を見るたびに父のことを想うだろう。

横浜市や東京都では公営の樹木葬墓地が売り出され、応募倍率が 16 倍を超える人気だそうだ。北海道でも「NPO 法人北海道に森を創る会」が講演会を開催したりして、樹木葬が関心を集めつつある。

私自身は、この講演会で札幌市立大学の上田裕文先生が紹介されていた、天然林の高木をそのまま墓標としたドイツ型の樹木葬墓地が好ましい。できれば墓標とする樹を生前に選んでおけるのがよい。道民の森などを活用してこうした墓地が作れないものか、新しい形の森とのふれあいの場として実現したいと思う。

（大堀尚己　昭和57年　林産学科卒）

―― 「氷点（石原さとみ主演：DVD 上下巻（2006 年 TBS 制作））を観て」

氷点とは「人が優しさや相手を思いやる気持ちを氷らせて（凍らせて）しまう状態」のことをたとえて使われています。自分の子どもを殺した殺人犯の子どもを育てるというストーリーで展開し、その経緯や出演者の心の動きを表現した作品です。主人公は辻口陽子（石原さとみと子役）で、最初のシーンは陽子の母である夏枝（陽子と養子縁組前）がちょっとした遊び心から長女ルリ子（確か6歳）にかまってあげれなく、その間に長女が殺されてしまうというショッキングな始まりです。父である啓造は妻への悪い思いから、自分の妻に殺人犯の子どもを引き取り、殺された

長女の代わりに育てさせようとします。そうとも知らず夏枝は陽子をかわいがります。しかし、陽子が小学生のころ、夫の日記を偶然読み返し、陽子が我が子を殺した犯人の子であることを知ります。それから、陽子へのいじめが始まります。しかし、夏枝のいじめに対し、人を憎むことを避けながら陽子は素直にすくすくと成長します。陽子が高校を卒業し、兄の友人でもある恋人と結婚を前提としたおつきあいを申し込みに来た日に夏枝は陽子が我が子を殺した犯人の子であることを告げます。そして、陽子は許しを乞い自殺を図ります。命は取り留めますが心に深い傷を負います。さらに実母が戦争に夫が行っている間に不貞を働いてできたのが自分であり孤児院に引き取られたことを知り、実母を憎みます。北大に進み、そこで父親違いの弟に出会い、彼に頼まれて実母と再会しますが、許しを乞う実母に「一生許せない」と言ってしまいます。それから40年が経ち、実母の葬式の日に陽子は出席せず、兄の友である夫から葬式で弟さんから渡されたものを受け取ります。それは木箱に入れられた陽子の「へその緒」でした。それを実母はずっと大事に持っていたそうです。そこで、陽子は自分も許しを乞うたことがあるのに、実母を許さなかった自分を後悔します。描写や挿入歌もとてもよいのでぜひレンタルしてみてはいかがでしょうか。

（安藤康光　平成3年　林産学科卒）

―― 林野庁に出向して丸1年になろうとしている。どんな恐ろしいところかとビクビクしながら来たが・・、やっぱり恐ろしいところだ。

省庁間で行う法令協議が恐ろしい。重箱の隅をつつくような厳しい問と返答がまるで戦場のように飛び交う。ただの縄張り争いと思うことなかれ。こうして法律は磨かれていくのだ。

国会も激しい。質問が降りてから3時間以内に長官まで「クリア」しなければならない。まるでゲームのようだが、林野庁では、上官の決裁（判子をもらうわけではない）を「クリア」と呼ぶ。林野庁に来てから4日目に早速国会答弁を任され、長官までクリアにいったが・・・、やっぱり怖かった。

文書の読み書きのスピードが恐ろしい。東大、京大卒とは、斯くも文書の読み書きが早いのかっ！と恐れ入ることは日常である。怠け者の北大生でたまにそういうやつもいるが、私のような者との頭脳の CPU の違いは如何ともしがたい。そういう土俵で勝負したらこてんぱんにやられる。と、色々びっくりしたが、仕事はそれなりに楽しい。だいぶ慣れてきたので一歩一歩着実にあと1年頑張ろうと思う今日この頃である。　近況報告まで

（土屋禎治　平成4年　林学科卒）

―― 修士を出てから早 10 年。入学からだと 16 年。時が経つのは早いものですね。「あの時こうしていれば」と思うことはよくあります。もちろん時間は不可逆なものなので、思うことしかできません。そんな後ろ向きな妄想よりも、「あの時そうしなかった」自分が、今、将来にできること考えたいのですが、年末ジャンボで 5 億円当たったらレベルの妄想が浮かんできます(笑)

さて、去年のシルバでは結婚しましたと書きましたが、運良くコウノトリさんが来

てくれて、もうすぐパパになります。子供に過度な期待をするものではないけれど、子供が将来の無限の選択肢をしっかり自分で考え想像し選んでいけるように、できる限りのサポートをするというのが、これからの一番の仕事のように思います。

ということで、まずは学資保険の検討から始めていますが、私のように毎月 2 万 7 千円 15 年間もの借金返済(奨学金)をさせたくないので、なるべく多めに積み立てていきたいものの、その返済があるためなかなか難しいです。日本の教育経費の高さは異常だと思いますが、選挙では全く争点になりません。将来への投資よりも現在の生活が大事ということもある程度は理解できますが、教育や研究に金をかけずに、ジジババの延命のために借金しているような国のままでは必ずいつか破綻する日が来ます。

やっぱり年末ジャンボを当てるしかないなぁと思う今日この頃でした。前後賞の 1 億円でもいいから当たってくれないかなぁ(笑)

(田戸岡尚樹　平成15年　森林科学科卒)

―― 森林科学科で過ごした 3 年間は、本当に充実したものでした。ソフトボール大会などシルバ会が関わった行事も思い出に残っています。卒業後は環境科学院に進み苫小牧研究林を拠点に研究を行います。院生生活でも、また社会に出た後も、学部時代に培った人間関係を大切にしていきたいと考えています。今までありがとうございました。

(佐藤　郷　平成26年　森林科学科卒)

―― 学生として最後に鹿児島での生態学会に行きました。せっかくなのでよく知らない南国の話題について聞きましたが、北国との比較ができ勉強になりました。初出勤前の落ち着かない日々ですが、私はこれからも北国の森林で頑張ります。

(下川部 歩真　平成24年　森林科学科卒)

―― 森林科学科の良いところは、優秀で個性的な先生・先輩方が多く、さらに実習や飲み会でそんな方々と親しくなれる機会も多いことだと思います。おかげで多くのことを学ぶことができ、お酒も飲めるように(飲まれるように？)なりました。楽しく充実した大学生活をありがとうございました。」

(辻田　茜　平成26年　森林科学科卒)

―― 4年間、素敵な仲間に恵まれ、楽しい大学生活を送ることができました！仲間にほんと感謝です。あと 2 年間、大学生活が残っているので、もっともっと素敵な時間を過ごして行きたいです！森林科学科最高！

(小川　真由　平成26年　森林科学科卒)

―― 来年度から東京にある化学メーカーに勤めることになりました(テレビ CM でおなじみの会社です)。今は人生最後の春休みを謳歌しています！夏の知床に行けなかったのが心残り…。

(土井 督史　平成24年　森林科学科卒)

―― 今年は戦後 70 年とのことです。自分は生まれて 50 年(切りがいいので 1 年サバよむけど)。生まれたときはまだ戦争が終わってからたった 20 年しかたっていなかったのだと思う。20 年というと、今から見れば神戸の震災や地下鉄サリン事件の起きたころ。当時の大人からすれば戦後はそうした出来事のあったぐらいの過去の感覚なのだろうか。スケールが違う気もしますが。ところで少年老い易く学成り難しとは若いうちに勉強しておかないとという意味のようなのですが学成らずに 50 年たった自分への対策は如何様にすればよいのかというのが問題。このまま死ぬまで変わらない気もするけど。

(岩田聡　昭和 62 年　林学科卒)

森林科学科の近況

学科長　　佐野　雄三

総会の開催時期が変更されたのに合わせて今回から会誌の発行時期も延びたため、例年より遅くなりましたが、森林科学科の近況についてご報告いたします。

前号以降の大きな動きとして、二つ紹介いたします。一つは、2014 年度の学科移行生（2 年目）より森林科学科では新たなカリキュラムによる授業を行うことになったことです。この変更により、必修科目（実習、演習、卒論を含む）が 12 科目（30 単位）から 18 科目（37 単位）に増え、逆に選択科目は 63 科目（50 単位以上を要修得、共通科目を含む）から 54 科目（43 単位以上を要修得）に減りました。内容的には、現職教員の興味・研究テーマ本位ではなく、森林の管理、育成、利用の基礎を修得できるよう必要な項目を漏れなく盛り込むことを基本方針の一つとして、足かけ 3 年の長きにわたり中堅どころの教員が中心になって検討を重ねた案をベースにしたものです。紙幅の関係上、詳述するわけにはいきませんが、例えば「森林計画学・同演習」と「林業生産システム論」は、名称が現代的になっていますが、それぞれ旧来の「森林経理学」と「林業工学」の内容もしっかりと含むようにしています。「木材理学Ⅰ・Ⅱ」のように、「木材工学」と「木材組織構造学」をスリム化のうえ、近年手薄になっていた「木材物理学」の項目も取り入れ、旧称で一括りに再編した科目もあります。また、「木材化学」や「林産製造学実験」のように、より分かりやすい旧称を復活させた科目もありますし、冬山実習や「森林美学及び更新論」のように北大ならではの特色ある科目を残す配慮も心掛けました。

もう一つは、部局の改組案が確定し、2015 年度から 2022 年度までの期間内に、農学研究院（教員組織）、農学院（大学院組織）、農学部（学部組織）のうち、研究院を学部に合わせる形で再編することになったことです。農学部の森林科学科を担当している計 9 研究室の場合、木質生命化学研究室（旧、木材化学～木質資源化学）は農学研究院において旧農芸化学系の 2 研究室とともに生命有機化学分野を構成していたため、教員人事は森林科学系の他の分野・研究室とは別個に行われていました。今回の改組により、教員組織としても森林科学系の 2 分野 8 研究室（森林資源科学分野 5 研究室、森林管理保全学分野 3 研究室）に合流して、森林科学分野に属することになります。また、直近の改組により 1 研究室・教員 2 名体制になってから日が浅いのですが、当初の懸念通りの問題が顕在化したため、1 研究室・教員 3 名を基本（定員の関係上、全研究室を 3 名体制にできるわけではありません）とする組織に改編されます。雇用可能な教員数には限度がありますので、1 研究室の教員数を増やすためには研究室数を減らさなければなりません。森林科学分野では、現行の 9 研究室から、森林科学科に再編される直前の旧林学科 4 研究室および旧林

産学科4研究室の流れを汲む8研究室(森林生態系管理学、流域砂防学、造林学、森林政策学、樹木生物学、木材工学、森林化学、木質生命化学)の枠組みをまずは残して再編し直すことになりました。これは 1 つの研究室を単に廃止するという措置ではありません。期限(2022 年度末)までに、上述した新カリキュラムの科目分担も考慮して複数研究室の教員を再配置するなどして、9 研究室から 8 研究室へと再編することです。これに応じて研究室名の変更も伴うことになる見込みです。少子化の必然的帰結として、教育機関のダウンサイジングは不可避です。これまでも教職員の定員削減により進んでいたのですが、いよいよ研究室の削減という身近なところで目に見えやすい形でのリストラをせざるを得ない段階に達しています。

各研究室の近況(2015 年 1 月時点)については、以下に研究室毎にまとめてもらった文章を転記しますので、ご覧下さい。

＜森林生態系管理学＞

森林生態系管理学研究室は、山浦悠一助教が 2014 年 4 月から森林総合研究所へ転出し、中村太士教授、森本淳子准教授の 2 名体制となりました。ポスドク 5 名、博士課程 3 名、修士課程 7 名、学部 4 年生 5 名が在籍しています。昨年から継続して、科研費と環境省推進費、国交省公募研究費を基盤に、生態系の連結性と生物多様性、十勝川河川生態学術研究、シマフクロウ・タンチョウを指標とした生物多様性評価(中村)、人工林・里山林の放置に伴う生態系サービス低減の評価、放棄農地の植生遷移と自然再生(森本)などに取り組んでいます。また、地球温暖化適応策(本年夏に閣議決定の予定)の一つとして、今年から生態系を活用した防災・減災・多様性の保全に取り組んでいきたいと考えています。

＜流域砂防学＞

平成26年度も、日本全国で豪雨による土砂災害が発生しました。また御嶽山の噴火により人的被害が出たことは、記憶に新しいところです。北海道にもそろそろ活動を活発化させてもよいような火山があり、噴火の際の土砂対策について多く講じられているところです。防災面のみならず、流域の土砂管理の面から、砂防学研究の意義はますます大きくなっている昨今です。

現在の研究室スタッフは、土砂流出・火山防災・荒廃地修復を専門とする丸谷知己教授と、砂防学的視点から斜面や河川の地形解析を行う笠井美青准教授です。研究員として、渓流保全と河川生態を専門とする布川雅典博士がいます。博士課程は 3 名(金正賢・後藤健・松尾一郎〈休学〉)、修士課程は 7 名、4 年生は 5 名が在籍しており、現地調査や室内実験、GIS 解析をベースに、流域の土砂動態解明に関する研究に取り組んでいます。卒業生や修了生の多くは国や地方の機関、建設コンサルタント、研究所などに就職しています。砂防地すべりセンターからの寄附講座である国土保全学研究室(農学研究院連携研究部門)の国土交通省元砂防部長の南哲

行特任教授と、土木研究所雪崩地すべり研究センター元所長の野呂智之特任准教授とは、随時協力して研究を推進しているところです。砂防は、現場から始まり現場に戻ることが肝要です。まずは現場を知ることをいつも心に留め、今後も地に足をつけた研究と「使える」人材を輩出する教育を心がけたいと思います。

＜森林政策学＞

森林政策学研究室は、柿澤宏昭教授、庄子康准教授の 2 名体制です。学部生 5 名、大学院生 6 名（うち社会人博士課程 3 名）が在籍しております。北海道林業のあり方、協働による森林管理のあり方、自然保護地域の管理手法、欧州の森林政策などの研究を行っております。昨年度からは、筑波大学などと共同で十勝地方の森林所有者の実態把握を行っております。今年は研究室全体で手分けして森林所有者に対する聞き取り調査を実施するとともに、森林所有者に対する郵送アンケート調査も実施致しました。アンケート調査の回答者の平均年齢は 69 歳であり、また多くの森林所有者に後継者がいないことが分かりました。地域林業をめぐる厳しさを教員・学生共々痛感することになりました。学部生・大学院生は林業、地域振興、自然環境保全など幅広い分野の中からテーマを設定し前向きに取り組んでいます。また、2014 年度は柿澤が事業責任者となり、文部科学省から「成長分野における中核的専門人材養成などの戦略推進」事業を北大が受託し、北海道に即した林業分野の社会人再教育のためのプログラムの開発や実証講座の開講を行っております。森林・林業を支える人材育成を社会人まで含めて取り組んでいきたいと思います。

＜造林学＞

教員は、小池孝良教授、澁谷正人准教授、齋藤秀之講師です。学生は日本人修士課程 7 名、4 年生 5 名、秋入学の英語コース博士課程が 2 名（日本学術振興会1名・中国、ギリシャ大使館推薦1名：キプロス出身）、環境資源学専攻の1名（中国の高水平制度学生：部局間協定校になった北京林業大学大学院出身）は「大気環境変化にともなう共生菌類の役割」を多面的に調べ博士課程終了です。また、姉妹校の韓国・全北大学校の出身者が英語コース修士課程に進学しました。同じく国際交流として姉妹校・中国・南開大学生命科学院伯苓班（北大新渡戸カレッジに相当）の学生が半年間、学部聴講学生として滞在しました。また、農学研究院研究員1名です。博士研究員・渡辺 誠さんは古巣・東京農工大学農学研究院・テンニュア准教授として、学術研究員・毛 巧芝さんは学部間協定校・中国重慶市の西南大学資源環境学院・講師に採用されました。

公有林・民有林・国有林と連携しながら林分の保育管理理論、林業システムに関する指導・研究、民間との共同によるインドネシアでの森林再生に関する研究、科研：ゲノム網羅的な発現遺伝子を指標にしたブナ林の環境影響評価などを展開中です。また、森林圏ステーション（＝旧演習林）のメンバーと科研：対流圏（地表付近）

オゾンの影響評価などの調査を始めました。関連した被食防衛に関する森林保護研究も継続しています。五十嵐先生・高橋先生はそれぞれのご専門の道で、我々、後進へ道をお示し下さっておられます。

＜森林資源生物学＞

森林資源生物学の教員は、矢島崇特任教授、玉井裕准教授、宮本敏澄講師の3名で、森林の物質循環、菌類と樹木の共生メカニズム、森林資源生物の利用技術等、森林性の植物や菌類の相互作用、生態と利用技術に関する研究を行っています。3 年生 4 名、4 年生 5 名、大学院生 6 名という構成で、多様な研究課題に取り組んでいます。大学院改組の際に誕生した所謂専担研究室ですが、16 年目を迎えて菌類を通して森を見て行くという方向性は森林科学科の中に定着してきたと思っており、学生の関心も高く、同窓生を含む学外の技術者たちからも新しい技術への期待の声を聞くようになりました。今後もユニークな研究・教育を進めて行きたいと考えています。

＜樹木生物学＞

教員は佐野雄三教授、荒川圭太准教授の 2 名体制です。教員以外の在籍者は、博士研究員 1 名、博士課程院生 1 名、修士課程院生 5 名、学部生 9 名（3・4 年目）、研究生 1 名、技術補助員 1 名です。そのほかに京都大学で雇用され北大に派遣という変則勤務の技術補助員 1 名が出入りしています。ここ 1 年の構成員に関する特記事項として、長く在籍あるいは研究室と縁深い博士研究員、学術研究員の異動が重なりました。4 月には渡辺（平井）陽子氏（林産 H3 卒）が研究林から復帰し、博士研究員として在籍しています。7 月には遠藤圭太氏（森林 H20 卒）がカナダの Saskatchewan 大学にポスドクとして渡航するため研究室を離れ、その後間もなく森林総研林木育種センターに採用され 10 月から着任しています。11 月には宇梶（桑原）慎子氏が北農研に移りました。研究面では、樹木の構造や形成、越冬に関する研究を継続するとともに、学内の異分野の研究者や外部機関との共同研究も活発に行っています。佐野教授は、「水分動態に関与する細胞壁微細構造の機能解剖学的研究」により第 54 回日本木材学会賞を受賞しました。

＜木材工学＞

木材工学研究室は平井卓郎特任教授（連携研究部門連携推進分野所属）、小泉章夫准教授、澤田圭助教、佐々木義久技術職員と学部生 8 名、大学院修士課程 4 名の構成で、樹木から木造住宅まで、幅広い対象について研究を進めています。樹木関連では林業試験場との共同研究で樹高 20m を越えるカラマツ樹冠の抗力係数測定試験を行いました。木質構造関連では、建築物に国産材や未利用材を使うために、構法や材質に留意した研究に取り組み、木造建築物の長寿命化のために、構造要素の劣化評価や補修方法の提案を目指して実験的研究を進めています。ま

た、平井特任教授を中心に、北海道産人工林材を用いた枠組壁工法用材の供給体制整備に関する産官学連携プロジェクトが進行しつつあります。北大の木造重要文化財15棟の大規模改修計画も進行中で、耐震補強設計に関して協力しています。

＜森林化学＞

森林化学研究室は、浦木康光教授、幸田圭一講師の教員2名と、学部学生3名、修士課程院生 2 名、博士課程院生 3 名（全て中国からの留学生で、今年 1 名が修士から進学）の構成です。本年度から浦木は、平井卓郎教授の代わりとして、北海道立総合研究機構森林研究本部林産試験場の上席客員研究員も兼務することになり、北海道の木質バイオマスの有効利用に向けた共同研究にも従事するようになりました。

研究は、木質バイオマスを無駄なく物質やエネルギーとして利用するバイオリファイナリーを目的に、「リグニンを原料とする電気二重層キャパシタ用部材の開発」、「木材細胞壁模倣多糖類マトリックス中でのリグニンの形成とその構造決定因子の解明」、「水溶性酢酸セルロースのナノファイバー化とその機能化」、「両親媒性リグニン誘導体を用いたバイオエタノール生産工程の開発」、「新規な繊維強化樹脂の製造を指向したセルロースナノファイバーの改質」や「落葉中のリグニン定量法の確立とその生分解過程の追跡」などといった課題に取り組み、最終的には、木質バイオマスに立脚した資源循環型社会の構築を目指しています。

＜木質生命化学＞

木質生命化学研究室は生方信教授、重冨顕吾助教の2名で研究室を運営しています。今年度を最終年度とする寄付講座関連では、融合研究分野の鎌形洋一特任教授、三橋進也特任講師と密接な協力関係にあります。バングラデシュ、インドネシアからの留学生を含み、博士後期課程大学院生 1 名、博士前期課程大学院生 5 名、学部学生 6 名の構成となっています。また研究室事務は水沼由子さんが担当しています。研究室では、森林資源由来の薬理活性物質の探索、合成、構造ー活性相関研究、低分子生理活性物質を用いた生命現象や細胞内情報伝達の解明に関する研究等をすすめています。具体的には、*Gymnopus* sp.由来の新規オートファジー誘導物質エポジムノラクタムの全合成と構造・活性相関研究、*Gloeostereum incarnatum* 由来のヒルスタノール A および C のオートファジー調節機構の解明、異種微生物間で働く超微量シグナル物質の解明、ムコン酸類の嫌気的生分解の評価、フローケミストリーを用いた新規合成法の展開とPP1 阻害物質トウトマイセチンの全合成研究など、新たな成果がでてきました。機会がありましたら、どうぞお寄り下さい。

平成２５年度 森林科学関連講座 卒業・修士・博士論文

卒業論文

森林科学科　造林学

熱帯泥炭湿地林に自生する樹木14種の苗木の沈水耐性	加藤　幹大
針広混交林における大規模風害後58年間の森林の動態	小杉　陵太
開放系オゾン暴露装置を利用したシラカンバ幼木の葉数の動態と被食防衛能	崎川　哲一
荒廃した熱帯泥炭地における早生樹トゥミ(*Combretocarpus rotundatus*)の直播造林法	武田　雄太
トドマツ人工林における林業機械による根系の損傷と腐朽	戸田　真理子

森林科学科　流域砂防学

十勝川水系然別川における階段状河床形の浸食過程	伊倉　万理
海岸林の生育箇所が砂丘形状の変化に及ぼす影響に関する実験的研究	鈴木　翔之
紀伊半島における2011年台風12号による深層崩壊発生斜面の地形解析	中村　直登
渓流内土石流堆積物の再移動	西浦　夏
十勝川水系然別川における河床低下予測	山本　紘也

森林科学科　森林生態系管理学

鳥類にとっての都市の透過性―モビングコールとサーキット理論を用いたアプローチ―	島崎　敦
人工林化に伴う風倒撹乱への影響の解明―天然林との比較研究―	中川　考介
人工放流時の撹乱想定範囲におけるケショウヤナギを中心とした先駆性樹種の更新について―北海道札内川の事例―	稲場　彩夏
農地景観における森林ネットワークを考慮した中・大型哺乳類の分布把握	矢部　敦子

森林科学科　森林政策学

地域共有財産としての都市近郊林の利活用―苫東環境コモンズの取り組み―	佐川　城一
白神山地における自然ガイドを中心とした地域観光振興の可能性	白戸　純也
北海道におけるCSRによる森づくり活動の現状と新たな展開の可能性	高辻　亮輔
北海道における森林経営計画策定と運用実態	成田　雅哉
北海道一般民有林における森林情報管理の実態	成影　実紀

森林科学科　森林資源生物学

未利用森林資源の生物的変換利用	影島　広一
ジンヨウイチヤクソウの菌根形態と共生する菌類	北村　啓
北海道に産するスギタケ属の系統解析	相澤　桃子

白旗山競技場スキーコースの森林復元―施工5年間の更新状態と課題―	深谷　祐輔

森林科学科　木材工学

長ほぞ込栓接合の引抜性能に及ぼす木栓に用いる樹種の影響	北原　岳明
トドマツ・カラマツ造林木の未成熟材の粘り強さ	橋本　光
造林木の樹幹ヤング係数の非破壊評価法の比較 － 静荷重試験、死荷重試験、応力伝播速度試験	日置　絵里香
道産人工林材の建築利用に関わる諸課題と展望	丸田　潤

森林科学科　樹木生物学

一部広葉樹において走査電子顕微鏡で存否を確認できる抽出成分に関する研究	鵜野　哲郎
高CO2下で長期間育成したブナの成長特性	海老原　香
組換えタンパク質を利用したカラマツ木部のデハイドリンの凍害保護活性に関する研究	加藤　潤
ハイブリッドアスペンの凍結挙動に関する研究	桜井　健至
カラマツ冬芽原基の深過冷却機構に関する研究	藤岡　拓

森林科学科　森林化学

リグニン系フレキシブルフィルムの開発	久保田　惇
東南アジア産沈水香木の香気成分と品質分類との関係解明	石井　貴史

森林科学科　木質生命化学

異種微生物間生育因子に関わる遺伝子の探索	小野寺　裕乃
Gymnopus sp.由来の(+)-Epogymnolactamの合成研究	岡戸　祐治
ムコン酸類資化菌の探索を目的とした2-Hydroxymuconic semialdehydeの合成研究	相良　勇起
森林資源からの原虫IMPDH阻害剤の探索	長岡　愛加
Tautomycetinの合成研究 -C6-C11セグメントの構築-	井上　周也

修士論文　農学院

環境資源学専攻　森林資源科学講座　造林学

開放系大気CO2増加施設に植栽されたカンバ類の葉の食害パターンと被食防衛	及川　聞多
ブナの開花の豊凶におけるフロリゲン遺伝子の役割－花成の環境応答メカニズムの解明に向けて－	小倉　俊治
摩周湖外輪山におけるダケカンバ衰退現象と養水分ストレスの関係-今後の予測と合わせて-	佐久間　彬
大規模風害後56年間の落葉広葉樹二次林における個体間競争	佐野　友紀
開放系大気CO2増加(FACE)施設で育成したカバノキ属3種の葉面積指数の経時変化	原　悠子

環境資源学専攻　森林資源科学講座　森林資源生物学

*Shorea balangeran*の天然更新立地における初期外生菌根相	植中　浩晃

環境資源学専攻　森林資源科学講座　木材工学

緑化木樹種の樹形による耐風性の評価	藤田　歩
北海道における地域材を用いた公共建築物木造化の現状と課題	橋本　泰治
西洋下見板を使用した歴史的木造建築物の耐震補強	片山　知美
引抜き型釘接合における腐朽と釘発錆の定量評価	高梨　隆也

環境資源学専攻　森林資源科学講座　森林化学

リグニンを原料とする電子デバイスの開発―電気二重層キャパシタ用セパレーター―	磯崎　友史
セルロース誘導体ゲルの熱応答性とゲスト分子の吸脱着特性	神田　高志

環境資源学専攻　森林・緑地管理学講座　森林生態系管理学

砂礫性節足動物の分布に対するダムの影響―生息環境の変化に着目して―	松平　将典
ヒグマによる食害の受けやすさを予測する―渡島半島の農地におけるヒグマ出没データを用いた解析―	櫻井　哲史
水域面積と大規模な森林からの距離が都市緑地の両生類の分布を決定する―日本北部北海道札幌市におけるケーススタディ―	冬木　愛実
Urban shade: 建物の隙間に生息するシダ植物の分布規定要因の解明	梶原　一光
指標種 vs 景観指標―分断化された湿地景観における多分類群での検証―	先崎　理之

環境資源学専攻　森林・緑地管理学講座　流域砂防学

北海道沙流川における浮遊土砂流出特性	小塚　菜津美
小型無人航空機を利用した地形計測による地すべり活動箇所の抽出	田中　健貴

環境資源学専攻　森林・緑地管理学講座　森林政策学

北海道における林業普及指導事業の現状と今後の役割	伊藤　翔平
北海道におけるプレカット工場の実態と道産材利用の可能性	松下　和敬

環境資源学専攻　森林・緑地管理学講座　花卉・緑地計画学

都市近郊の自然歩道利用者の行動と意識～札幌市三角山・円山を事例として～	魏　子祺
エンレイソウとオオバナノエンレイソウ種子の発芽と休眠ならびに分布域との関連	多田　純也

応用生物科学専攻　生命分子化学講座　木質生命化学

放線菌由来のPPI1阻害剤および樹皮由来のAGEs形成阻害剤に関する研究	岡田　直己
4-Hydroxybutanoate鎖を応用した光延反応アシロキシドナーの開発	佐井　勇介

博士論文（論文博士含む）

農学院

発生域と堆積域での土砂動態を考慮した土石流危険渓流の再評価に関する研究	中野　泰雄

平成２６年度 森林科学関連講座 卒業・修士・博士論文

卒業論文

森林科学科　造林学

北方針広混交林における優占種の成長に与える競争効果の長期変動	佐藤　郷
ブナの花成におけるエピジェネティックな環境制御の可能性―フロリゲン遺伝子におけるDNAメチル化に着目して―	小向　愛
開放系大気オゾン暴露施設下で生育したブナの樹冠構造	鈴木　優輔
ニセアカシア落葉と炭の添加がクロマツ苗木の水分生理状態及び菌根形成に与える影響－マツ材線虫病の耐性に注目して－	渡辺　花観

森林科学科　流域砂防学

火山山麓における宅地の拡大が土石流被害範囲に与える影響	影山　大輔
貯留関数法を用いた千歳川の洪水氾濫範囲予測に関する研究	鬼頭　駿一
流木を含んだ土石流の衝突荷重測定実験	野坂　隆幸
航空レーザー測量データ解析による斜面変動箇所の抽出	裵　希恵
地質境界が及ぼす風化土層の発達と崩壊深に関する研究−和歌山県那智川流域における2011年台風災害の事例−	柳井　一希

森林科学科　森林生態系管理学

高齢級トドマツ人工林における混交林化の可能性―施業履歴と種子供給源に着目して―	大竹口久美子
土地利用は生物の広域分布に影響するか？―夜行性鳥類ヨタカの個体数による検証―	河村　和洋
本流-サイドチャネル間における魚類の移動パターン　―季節性および日周性に着目して―	下村　晃平
種数－面積の関係に生息地の質は影響するか？～耕作放棄地の鳥類個体数推定からのアプローチ～	埴岡　雅史
都市緑地公園に生息するエゾアカガエルの遺伝構造の把握	宮川　絵里香

森林科学科　森林政策学

道内森林組合の類型区分とその規定要因―地域林業構造に着目して	間島　渉
自然公園における協力金の使用目的についての考察―管理者と利用者の要望を踏まえて―	千葉　大洋
ヒグマとの軋轢緩和を目的とした情報提供の課題―知床への訪問者に対するアンケート調査から―	辻田　茜

山林の継承・管理に意欲ある後継者の現状	烏野　亮祐
道民の森を活用した環境教育活動の展開―小学校の宿泊学習を事例として―	水野　明洋

森林科学科　森林資源生物学

食用きのこ栽培におけるホエイの利用	江川　美奈子
クマイザサを用いた簡易なきのこ栽培	大石　哲
石狩海岸に生育する海浜植物相の分布及び菌根形成状況	阿部　美聡
山地渓流の落葉分解過程における菌類相の遷移	山本　航平
森林河川に生息する水生不完全菌の種構成に及ぼす物理的化学的環境の影響	島本　翔子

森林科学科　木材工学

内部腐朽した木材の部分横圧縮性能	斎藤　のぞみ
枠組壁工法開口壁における縦枠材の水分変化がせん断性能に及ぼす影響	佐野　晃基
木材の収縮を圧締に用いた丸ほぞ接合の引抜き性能	蓮佛　喬

森林科学科　樹木生物学

カラマツ木部における冬季誘導性メタロチオネインについて	加藤 健太郎
モノグラフ『別子銅山』―鉱山備林の荒廃と植生回復に関する史的研究―	馬場 孝三
冬芽内部形態の光学顕微鏡観察	松村 萌美
カラマツ頂端分裂組織の細胞構造の変化について	守沖 彩

森林科学科　森林化学

水溶性酢酸セルロースのナノファイバー化とその機能化	鶴原　正啓
リグニン分布の同位体顕微鏡観察に向けたD-コニフェリルアルコールの調製	小川　真由
繊維強化樹脂合成のための疎水化セルロース誘導体の調製	荒井　冬香

森林科学科　木質生命化学

β-O-4型人工リグニンモノマーのワンポット合成法の検討	小川　陽香
積雪下におけるリター分解酵素の探索に向けたリグニン分解酵素の活性評価系の確立	前川　有也

修士論文　農学院

環境資源学専攻　森林資源科学講座　造林学

（該当なし）	

環境資源学専攻　森林資源科学講座　森林資源生物学

サケ死骸分解跡の林床における窒素動態とそれに対する菌類の影響	福井　喬史
北海道南部に生育するラン科陰生植物の地下部の形態と菌根菌相	小島　広平
北海道産アミガサタケ類の生態的特性	雲英　真人

環境資源学専攻　森林資源科学講座　木材工学

北海道地域に適した木造住宅の構造的検討	飯田　百合子
腐朽が生じたボルト接合部のせん断性能変化と非破壊評価	菅野　勇太郎

環境資源学専攻　森林・緑地管理学講座　森林生態系管理学

湿原域の放棄牧草地における植生回復を目指したシードバンクの解明	柴田　昌俊
風穴地を含む地域における高山植物コケモモ集団の遺伝構造	下川部　歩真
個体群再生計画下でのシマフクロウの分散:動的分布モデルを用いた予測	吉井　千晶

環境資源学専攻　森林・緑地管理学講座　流域砂防学

山地渓流における支流合流による堆積土砂の粒径組成と流出しやすさの変化	日名 純也
摩擦型ダムの堤体の設置間隔と規模が土砂調節機能に及ぼす影響	白井 貴也
北海道における貯水池堆砂速度に及ぼす流域要素に関する研究	伴 大地

環境資源学専攻　森林・緑地管理学講座　森林政策学

都市農村交流を主とした地域振興の展開過程―北海道黒松内町を事例として―	柴崎 祐一郎

応用生物科学専攻　生命分子化学講座　木質生命化学

Sphingomonas sp. GF9株の異種バクテリアに対する増殖因子の単離・構造解析	髙井　亮吾
*Gloeostereum incarnatum*由来のHirsutanol AおよびHirsutanol Cのオートファジー調節機構	土井　督史

博士論文（論文博士含む）

農学院

Study on the effects of elevated CO2, O3 and high nitrogen loading on the rhizosphere dynamics of deciduous trees. 落葉樹の根圏動態に対する高CO2とO3及び高窒素負荷の影響に関する研究	王　暁女那
Influences of wetland network structure on species and genetic diversity of freshwater fish in agricultural landscape. 農地景観における湿地ネットワークの構造が魚類の種および遺伝的多様性に与える影響	石山　信雄
The interaction between agricultural land use and flood disturbance on aquatic insects –Approaches from community and population dynamics and genetic structure– 農地利用と洪水撹乱が水生昆虫に及ぼす相互作用効果–群集・個体群動態及び遺伝的構造からのアプローチ–	末吉　正尚

会務報告

2014 年(平成 26 年 1 月 12 日)、札幌三越デパート別館 4F ライラックの間で、2014 年度シルバ会の総会と懇親会を開催致しました。総会には 31 名の会員の皆様にご参加頂きました。総会では、前年度の会務報告や会計報告等が行われました。総会終了後、同会場にて懇親会が盛大に催されました。

以下に総会で議題となった事業報告、会計報告などの概略を掲載致します。

＜事業報告＞

1. 会員現況(2013 年 1 月現在)

・会員総数　　1,840 名(うち学生会員 202 名)
・会誌購読会員数　731 名(うち学生会員 167 名)

2. 2013 年度事業報告

(1) 総会・懇親会開催
(2013 年 1 月 12 日・札幌三越デパート別館 4F ライラックの間)
出席者 51 名
決算、事業計画、予算案の審議・承認
役員選出 会長ほか監事 2 名, 幹事 10 名承認
(2) 森林科学科予餞会への補助(2013 年 2 月 14 日)
(3) 森林科学科ソフトボール大会への補助(2013 年 5 月 30 日)
(4) シルバ会懇親ゴルフ大会
(第 67 回:2013 年 5 月 18 日・第 68 回:2013 年 9 月 7 日)
(5) 会誌シルバの印刷(900 部)と発送

3. 2014 年度事業計画

(1) 総会・懇親会の開催
(2014 年 1 月 12 日・札幌三越デパート別館 4F ライラックの間)
(2) 森林科学科予餞会への補助(2014 年 2 月 7 日)
(3) 森林科学科ソフトボール大会への補助(2014 年 5 月 29 日)
(4) シルバ会ゴルフコンペの開催
(第 69 回:2014 年 5 月 17 日・第 70 回:9 月 6 日)
(5) 会誌シルバの印刷(900 部)と発送

4. 2014 年度役員（下線は新役員）

会長：小泉章夫(林産・昭 56)
幹事：紺野忠義(林学・昭 37)、堂城佳春(林産・昭 38)、
川端治彦(林産・昭 41)、八丁博成(林学・昭 41)、
相内泰三(林産・昭 47)、孫田敏(林学・昭 52)
会誌：上野俊弘(林学・平 4)、日比野寛太(森林・平14)、
仲澤健(森林・平 15)
会計：重冨顕吾(森林・平16)
総務：幸田圭一(教官)
監事：船越三朗(林学・昭 40)、松田 彊(林学・昭 41)
役員交代：山内森雄(林学・昭 33)、竹内恒夫(林学・昭 34)、
佐々木健人(森林・平 11)、平井卓郎(林産・昭 50)、
笠井美青(教官)

シルバ会総務担当幹事:　幸田圭一
〒060-8589　札幌市北区北九条西 9 丁目
北海道大学　大学院農学研究院
森林化学研究室
TEL 011-706-3197
E-mail: cody@for.agr.hokudai.ac.jp

会誌担当幹事: 仲澤健
〒060-8588　札幌市中央区北三条西 6 丁目
北海道水産林務部林務局
林業木材課需要推進グループ
TEL 011-231-4111(内線 28-479)
E-mail: nakazawa.ken@pref.hokkaido.lg.jp

＜会計報告（２０１３年度決算報告）＞

（平成25年1月1日～平成25年12月31日）

収入の部　　（単位:円）

費目	予算額	決算額	増減	備考
前期繰越	673,340	673,340	0	
会費収入	490,000	701,500	211,500	570人(千×403、五百×167)※
広告収入	0	0	0	
総会会費収入	200,000	249,000	49,000	
雑収入	60	50,000	49,940	
計	1,363,400	1,673,840	310,440	

※会費収入のうち701,500−486,500＝215,000がほぼ前受け金の合計額に相当する

支出の部　　（単位:円）

費目	予算額	決算額	増減	備考
印刷費	505,000	433,544	−71,456	シルバ等印刷
通信費	155,000	167,083	12,083	郵送、振替料等
事務費	70,000	60,000	−10,000	事務用品、事務補助謝金等
同窓会補助	90,105	90,105	0	予餞会等
総会会場費他	200,000	250,000	50,000	
雑費	21,000	20,506	−494	封入作業賃等
予備費	322,295	0	−322,295	次年度繰越金
計	1,363,400	1,021,238	−342,162	

次年度繰越金

	収入	1,673,840円
−	支出	1,021,238円
	次年度繰越金	652,602円

編集後記

今回からシルバの発行が春になり、そのおかげで編集も少しは余裕があるのかと思いきや、結局最後はバタバタとなり、編集作業を一身に背負っている仲澤さんはさぞかし大変だったと思います。

今年は桜前線も新幹線並に早く駆け抜け、札幌もGWには桜が終わってしまうほど。これも地球温暖化の影響かと思いつつ、気候変動による高山植生の衰退に頭を悩ませる今日この頃。エゾシカの増加といい、外来種の拡大といい、北海道の生物多様性はこれからどうなってしまうのだろうか。

北海道の生物多様性保全行政に御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

（上野 俊弘　平成4年　林学科卒）

網走を離れ、10年ぶりに札幌での生活を始めてから、この春ではや3年目。都会ならではの様々な物珍しい風物に触れてきましたが、中でも特に気になったのは「犬」でした。

最初は単なる違和感に過ぎなかったのですが、ある日、その正体に気がつきました。犬は頻繁に見かけるのに、ほとんどの犬が歩いていないのです。手押し車に乗った犬、自動車に乗った犬、人に抱えられた犬…。「犬の散歩」とは犬が歩くものだと思っていた自分には、飼い主の小脇に抱えられて「散歩」している犬の姿は衝撃的でした。さらに我が家の周囲を見渡してみれば、犬の美容院、犬のホテル、犬の小学校、犬の保育園…。

いつのまにか、星新一の「ショートショート」の中の世界に迷い込んでしまったかのような錯覚を覚える今日この頃です。

（日比野寛太　平成14年　森林科学科卒）

今回、編集を担当しました。御投稿いただいた皆様、編集に御協力いただいた皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。そして、日程の余裕があったにもかかわらず、連絡等が後手になってしまい御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

慣れない事なのでハラハラ。何本の投稿があるのか、字数や写真の枚数は如何、そもそも例年程度の頁数を満たすことができるのか・・・不安の一方で、いただいた原稿を一番に読めるという、編集担当の特権を楽しむことができました。

年に1回、会誌を手に大学時代を振り返るのもいいものです。そして飲み交わしましょう！みなさんの今後の御活躍と御多幸を祈念して、コチャエ　コチャエ。

（仲澤　健　平成15 年　森林科学科卒）

ご寄稿下さい

「シルバ」は会員の皆様の寄稿で成り立っています。
是非ご寄稿下さい。

寄稿資格：シルバの会員であること（会費納入の有無は問いません）
文字数・体裁等：1,200～4,800字を目安にして下さい。
写真・絵なども掲載可能です（白黒になる場合があります）。
締め切り：毎年1月31日頃
（ご寄稿予定の方は、前もってその旨をご連絡いただけると助かります）

投稿先・詳細のお問い合わせ先
シルバ編集幹事　仲澤　健（平成15年　森林科学科卒）
〒060-8588　札幌市中央区北3条西6丁目
道庁水産林務部林業木材課
TEL　011-231-4111（内線 28-479）
FAX　011-232-1294（FAXをいただく場合は、事前にご一報ください）
E-mail nakazawa.ken@pref.hokkaido.lg.jp

広告募集

シルバは広告収入と会員からの会費で発行しております。
読者は林学・林産学・森林科学の卒業生・修了生、総勢約 1,700 名。
記事と連携した広告掲載も可能です。
是非、ご検討下さい。